京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2007-15

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇〇七―一五

伏見城跡

伏　見　城　跡

2008 年

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

伏　見　城　跡

2008 年

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、これまでに多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた古都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様へ京都の地域の歴史に対し関心を深めていただけるよう努めております。

当研究所では、平成 13 年より個々の発掘調査の概要をまとめた報告書を刊行しており、その成果を公表しています。

このたび、伏見区総合庁舎整備事業にともなう伏見城跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきましてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際してご協力ならびにご支援たまわりました関係者各位に厚く感謝し、お礼申し上げます。

平成 20 年３月

財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　川　上　　貢

例　　言

1	遺　跡　名	伏見城跡
2	調査所在地	京都市伏見区竹中町 640 番地
3	委　託　者	京都市長　桝本賴兼
4	調 査 期 間	2007 年 11 月 27 日～ 2008 年２月４日
5	調 査 面 積	約 540 ㎡
6	調査担当者	山本雅和・能芝妙子
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「丹波橋」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位 (m) を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用基準点	京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
11	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
12	遺 構 番 号	４区・５区・６区・７区それぞれで通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
13	遺 物 番 号	土器類・木製品・土製品の順に通し番号を付した。
14	掲 載 写 真	村井伸也・幸明綾子が担当し、遺構の一部は調査担当者が行った。
15	基準点測量	宮原健吾が担当した。
16	本 書 作 成	山本雅和・能芝妙子
17	編集・調整	中村　敦・児玉光世・山口　眞

目　　次

１．調査の経緯 …… 1
２．遺　　跡 …… 1
（１）遺跡の位置と環境 …… 1
（２）周辺の調査 …… 4
（３）第１次調査の成果 …… 6
３．４区の調査 …… 7
（１）４区の遺構 …… 7
（２）４区の遺物 …… 15
４．５区の調査 …… 21
（１）５区の遺構 …… 21
（２）５区の遺物 …… 23
５．６区の調査 …… 23
（１）６区の遺構 …… 23
（２）６区の遺物 …… 25
６．７区の調査 …… 26
（１）７区の遺構 …… 26
（２）７区の遺物 …… 28
７．ま と め …… 29

図　版　目　次

図版１　遺跡　１　４区北壁（南東から）
２　４区第１面全景（東から）
図版２　遺構　１　４区土間 17（北から）
２　４区土坑 27（北東から）
３　４区土坑４遺物出土状況（西から）
４　４区土坑 83（北から）
図版３　遺構　１　４区第２面全景（東から）
２　５区全景（東から）
図版４　遺構　１　６区第１面（北から）

2　６区第２- １面（北から）
3　６区第２- ２面（北から）
4　６区第３面（北から）
図版５　遺構　1　７区第２面（北東から）
2　７区土坑２下部（南から）
3　７区第３面（北から）
図版６　遺物　４区土坑 180 出土土器１（１：４）
図版７　遺物　４区土坑 180 出土土器２・土坑 247 出土土器（１：４）
図版８　遺物　４区土坑 52 出土土器（１：４）
図版９　遺物　４区土坑 116 出土土器・土坑 61 出土坩堝（１：４）
図版 10　遺物　1　木製品
2　鞴羽口
3　鉄滓

挿　図　目　次

図１　調査地点図 …… 1
図２　調査区配置図（１：800） …… 2
図３　４区調査前状況（南東から） …… 3
図４　５区調査前状況（北から） …… 3
図５　６区・７区調査前状況（南南東から） …… 4
図６　４区作業風景（東から） …… 4
図７　調査位置図（１：5,000） …… 5
図８　４区北壁断面図（１：50） …… 8
図９　４区第１面遺構平面図（１：150） …… 9
図 10　４区土坑４実測図（１：20） …… 10
図 11　４区土坑 27 実測図（１：20） …… 10
図 12　４区第２面遺構平面図（１：150） …… 11
図 13　４区石列 191 実測図（１：20） …… 12
図 14　４区柱穴 259・256・175・167・252・168 実測図（１：50） …… 13
図 15　４区出土木製品実測図（１：２・１：４） …… 18
図 16　４区出土土製品実測図（１：４） …… 20
図 17　５区南壁断面図（１：50） …… 21

図 18　５区遺構平面図（１：150）　…… 22
図 19　６区南壁断面図（１：50）　…… 23
図 20　６区遺構平面図（１：150）　…… 24
図 21　７区西壁断面図（１：50）　…… 26
図 22　７区遺構平面図（１：150）　…… 27
図 23　７区土坑２実測図（１：20）　…… 28
図 24　遺構概要図　室町時代（１：600）　…… 30
図 25　遺構概要図　桃山時代（１：600）　…… 31
図 26　遺構概要図　江戸時代（１：600）　…… 32

表　目　次

表１　遺構概要表　…… 14
表２　遺物概要表　…… 15

伏　見　城　跡

１．調査の経緯

今回の調査は、京都市伏見区総合庁舎整備事業に伴う伏見城跡埋蔵文化財発掘調査である。調査地では 2005 年６月３日から 2006 年９月１日にかけて、第１次調査として約 4,435 ㎡を対象に発掘調査を実施しており、今回の調査は第２次調査となる[1)]。

調査地は伏見城跡の城下町西部にあたっており、第１次調査では室町時代後期から江戸時代の遺構を多数検出するとともに、多量の遺物が出土した。第２次調査対象地においても、第１次調査と同様に遺構の検出、遺物の出土が確実であったため、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課及び京都市文化市民局市民生活部区政推進課との協議により、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け発掘調査を行うこととなった。

調査区は開発対象予定範囲にあわせて第１次調査の調査区に接する４箇所に設定した。第１次調査を３つの調査区に分割して実施したことを受けて、今回の調査区は通し番号を付して４区から７区とした。４区は１区北西側、５区は２区南側・３区南東側、６区は１区西側北寄り、７区は１区西側南寄りに位置する。調査面積は合わせて 540 ㎡である。

発掘調査は 12 月 10 日から機械掘削を開始した。４箇所の調査区では、それぞれ４区は２面、５区は１面、６区は４面、７区は２面に分けて精査を行い、遺物を採集した。各遺構面では遺構検出、遺構登録を行い、状況が明らかになった段階で写真撮影、遺構実測を実施した。また、掘削土はすべて調査地内で処理し、2008 年２月１日に埋め戻しを終了した。

２．遺　　跡

（１）遺跡の位置と環境

調査地の地理的・歴史的状況について概観する[2)]。

調査地の立地　調査地は京都盆地東側を画する東山南端、桃山丘陵の西側斜面に立地する。調査地の現在の標高はおよそ 14 ～ 17 mで、北東から南西に向かって傾斜している。周辺には伏見城城下町造営に伴い整備された南北街路である京町通・両替町通・新町通・竹中町通・南部町通とこれらに直交する東西方向の街路により、南北方向に細長い長方形街区が形成されている。これらの街区は街路を境界として段々の平坦面を形成しており、

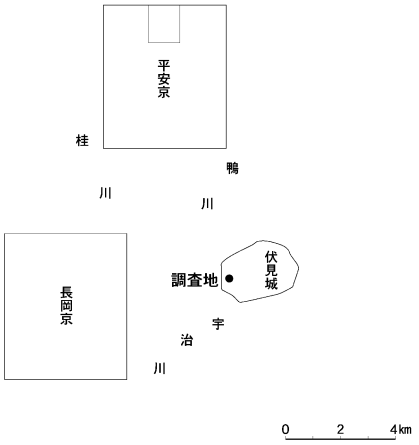


図１　調査地点図

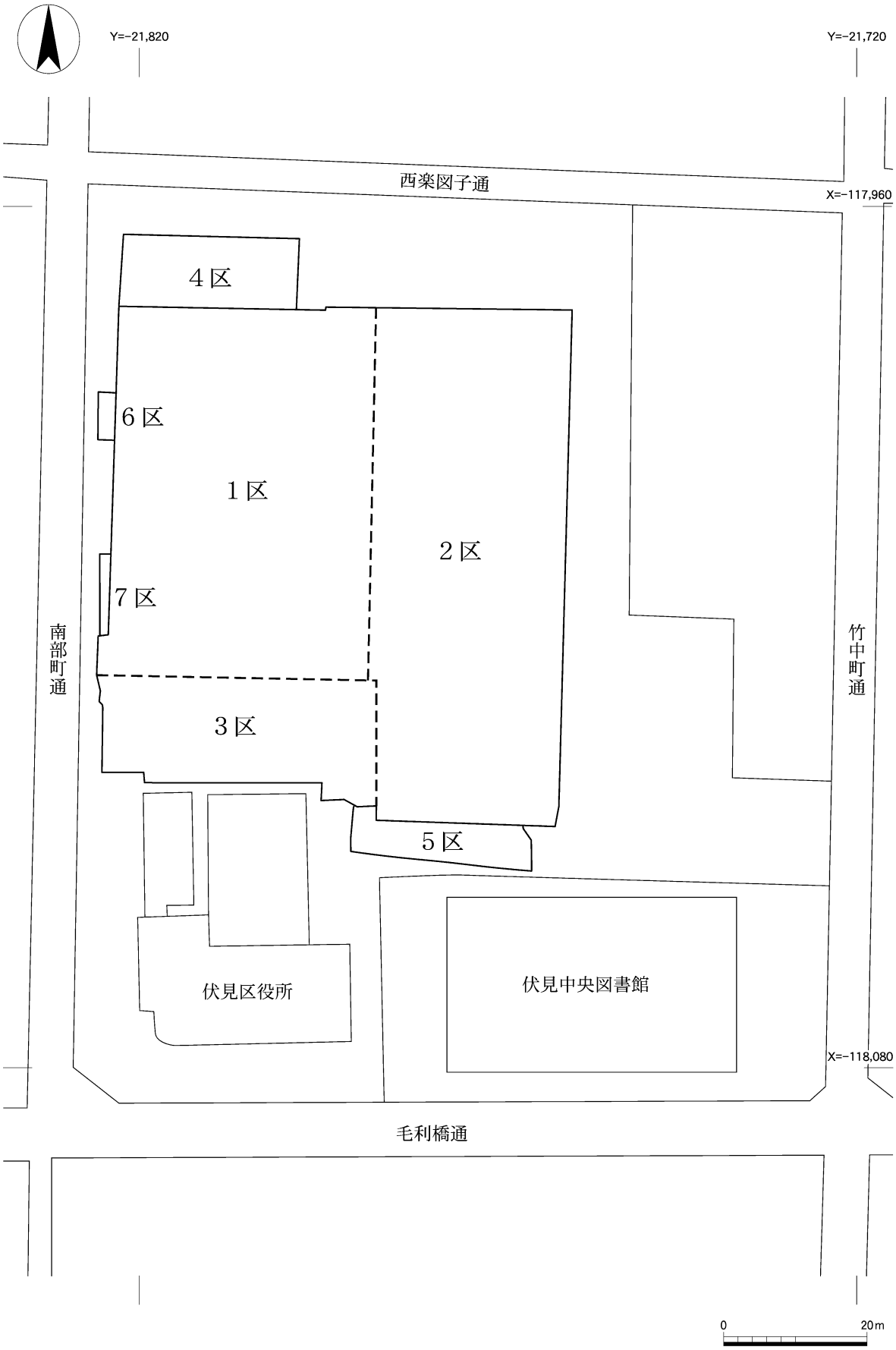


図２　調査区配置図（１：800）

図３　４区調査前状況（南東から）

図４　５区調査前状況（北から）

旧地形は伏見城城下町造営に伴い大規模な改変を受けたことが推測できる。

室町時代以前　伏見城城下町造営のため、より古い時代の遺跡の痕跡は少ない。調査地の北約250 mの位置には板橋廃寺があったと推定されている。板橋廃寺は採集された瓦から奈良時代前期の寺院跡と考えられているが、明確な遺構は検出されていない。西楽図子通をはさんだ調査地北側には金札宮がある。城下町造営以前の集落である久米村の社で、城下町造営後も同じ場所に位置しているとの伝承がある。

桃山時代　伏見城は文禄元年（1592）に豊臣秀吉が指月山に城郭を構築したことにはじまる。指月山は宇治川に臨む風光明媚な場所で、当初は秀吉の隠居所として屋敷が造られたとも伝えられているが、間もなく本格的な城郭として増改築が行われた。ところが、この城は慶長の大地震（1596）で倒壊してしまう。そこで、秀吉は直ちに指月山北側の木幡山全体に大規模な城郭を構築する。本丸・天守閣は最高所である現在の明治天皇陵の位置にあり、地形を利用して二の丸・山里丸など複雑に曲輪を配置した大城郭であった。慶長三年（1598)、秀吉はこの城で終焉を迎える。

その後、伏見城は実質的に徳川家康の支配下におかれ、関ヶ原の合戦（1600）前夜には、西軍の攻撃を受け落城する。しかしながら、京都・大坂を結ぶ立地の重要性から慶長六年（1601）に再建が開始され、あらためて徳川氏の拠点として整備される。やがて大坂夏の陣（1615）で豊臣氏が滅亡し、また、京都の拠点として二条城が造営・整備されることにより、伏見城の政治的な意義は失われ、元和九年（1623)、徳川家光の将軍宣下を最後に廃城されるにいたった。

調査地は伏見城跡の城下町西部にあたっている。城下町の整備は文禄三年（1594）頃には着手されていたと推定できる。木幡山西麓を中心に町割が行われ、南北方向に細長い長方形街区が形成された。また、丘陵斜面裾には城下町の中心部を囲むように濠が掘り廻らされた。同時に伏見港の整備や宇治川・巨椋池の改修も行われ、これらの工事により広大な城下町が建設されたのである。また、秀吉の死後も徳川氏により引き続き城下町の整備が行われた。

伏見城城下町には豊臣氏・徳川氏配下の武家屋敷が多数造営され、有力大名の屋敷は城郭周辺に集められた。町人の居住区は南北方向に縦貫する京町通・両替町通を中核としており、その西側には寺社が配置された。城下町の様子は後の時代に絵図に描かれ、中には調査地に岡田善同・

図５　６区・７区調査前状況（南南東から）

図６　４区作業風景（東から）

仙石忠政の屋敷があったことを示す絵図（「伏見城下総絵図」）もある。同じ絵図には調査地東側の竹中町通（常盤通）に沿って南北に細長く町屋が建ち並んでいた状況が描かれている。

江戸時代　伏見城廃城後、城郭内の建物は各地の城郭や寺社に移建、あるいは破却されるにいたった。石垣の石材は新たに築城中の淀城に利用された。城下町の武家屋敷の多くも移転した。しかしながら、伏見の町は徳川政権下にあっても江戸時代を通じて、京都・大坂を結ぶ水陸交通の要所、商業都市として栄え続けることとなる。街路に沿って町屋が建ち並び、武家屋敷が移転した跡地や未開発のまま残されていた空閑地には新たに町屋が建てられたり、また、耕作地としての利用が行われながら、全体としては徐々に市街地が拡大・充実していったと推測できる。

調査地を含む街区には、西部中央に真福寺という日蓮宗寺院があり、その周囲には街路に面して町屋が建ち並ぶ状況が絵図（「山城国伏見街衢並近郊図」）に描かれている。

（２）周辺の調査（図７）

調査地周辺では、これまでに多くの発掘・立会調査が行われているが、ここでは主要な調査の概要を記する。

調査地南東側に隣接する伏見中央図書館建設工事に伴う発掘調査（図７－１）では、平安時代前期の溝・土坑、桃山時代から江戸時代の建物・柵・井戸・土坑・柱穴などを検出した。出土遺物には平安時代前期の土師器、桃山時代から江戸時代の土師器・陶器・磁器、瓦、漆器・箸・籠・人形・木簡・下駄・建築部材などの木製品、簪・刀子・金具などの金属製品、硯などの石製品がある。木製品は大規模な土坑からまとまって出土した[3)]。

毛利橋通を隔てた調査地南側の共同住宅建設工事に伴う発掘調査（図７－２）では、平安時代後期の溝、桃山時代から江戸時代の多数の井戸・土坑・柱穴などを検出した。桃山時代から江戸時代の遺構の中には大規模な土坑が２基ある。一つは直径約８ｍ・深さ約４ｍ、もう一つは一辺約 10 ｍ・深さ約 4.5 ｍで、底部より時計回りに登るスロープが作り出される。出土遺物には平安時代の土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器、桃山時代から江戸時代の土師器・陶器・磁器、瓦、漆器・箸・箆・櫛・木簡・下駄などの木製品、金属製品、石製品がある。木製品は大規模な土坑からまとまって出土した[4)]。

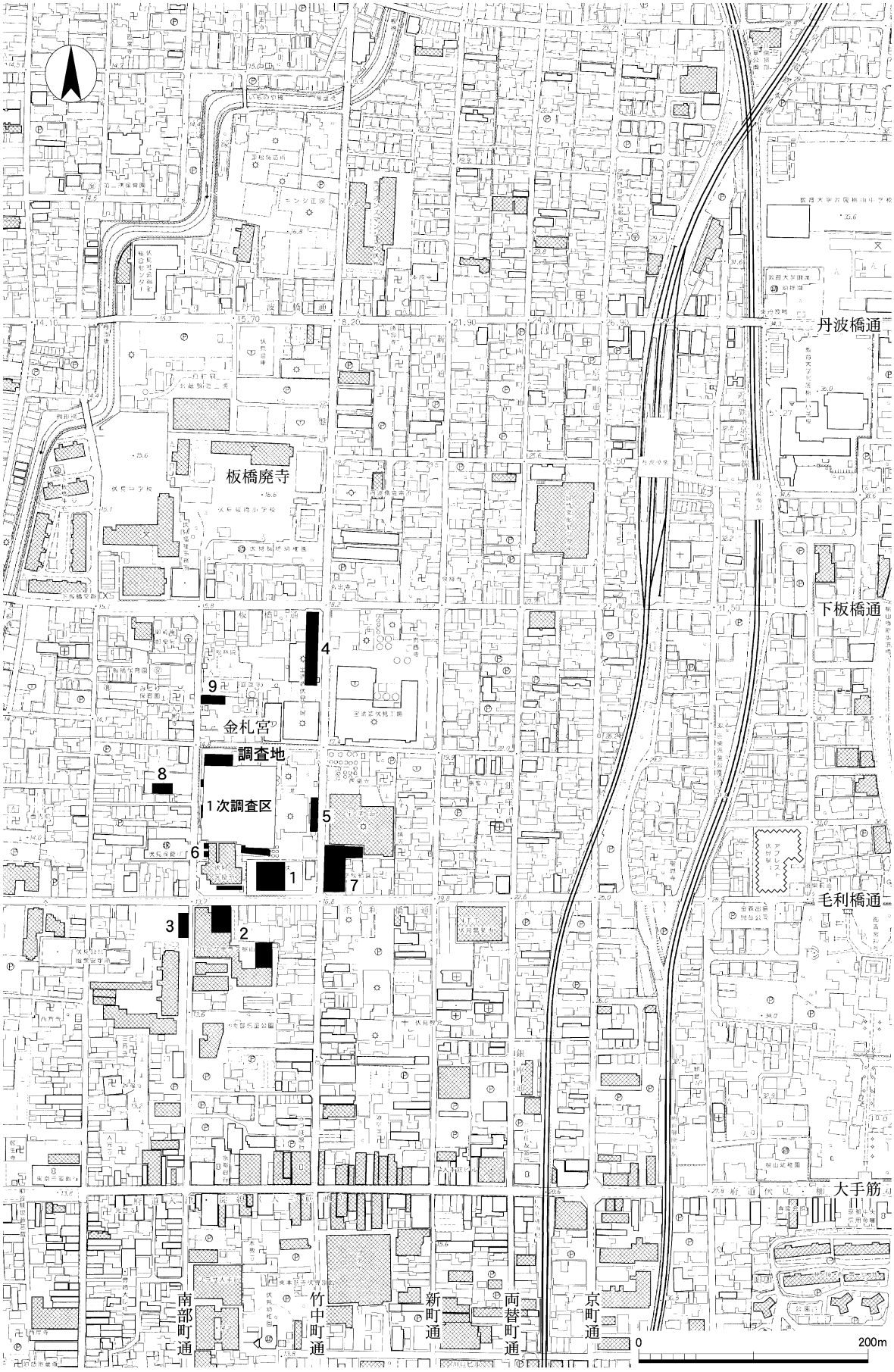


図７　調査位置図（１：5,000）

毛利橋通･南部町通を隔てた調査地南西側の共同住宅建設工事に伴う発掘調査（図７－３）では、室町時代の溝、桃山時代から江戸時代の塀・土坑・柱穴・庭園などを検出した。室町時代の溝は３条あり東西方向で西側でやや北に振る方位をとる。出土遺物には平安時代の須恵器、桃山時代から江戸時代の土師器・陶器・磁器、瓦、木製品、銭貨などの金属製品がある[5)]。

西楽図子通を隔てた調査地北側の共同住宅建設工事に伴う発掘調査（図７－４）では、奈良時代の竪穴住居・土坑、桃山時代から江戸時代の柵・溝・井戸・土坑・柱穴などを検出した。奈良時代の遺構を検出したことは板橋廃寺との関連も含めて注目できる。出土遺物には奈良時代の土師器・須恵器、桃山時代から江戸時代の土師器・瓦器・陶器・磁器、瓦があり、このほかに江戸時代の坩堝・鞴羽口・鉄滓など製鉄に関連する遺物がまとまって出土した[6)]。

調査地東側に隣接する工場敷地で実施した立会調査（図７－５）では、地表下約 0.5 mで桃山時代から江戸時代の遺物包含層を検出した[7)]。

調査地南西側に隣接する伏見区役所敷地で実施した立会調査（図７－６）では、地表下約 0.7 mで桃山時代から江戸時代の遺物包含層、江戸時代の土坑を検出した[8)]。

竹中町通を隔てた調査地東側で実施した立会調査（図７－７）では、地表下約 0.3 mで江戸時代後期から末期の土坑を検出した[9)]。

南部町通を隔てた調査地西側で実施した立会調査（図７－８）では、地表下約 0.5 mで江戸時代以降の遺物包含層を検出した[10)]。

西楽図子通を隔てた調査地北側で実施した立会調査（図７－９）では、地表下約 0.4 mで江戸時代の土坑を検出した[11)]。

立会調査で検出した遺構は桃山時代以降の土坑・遺物包含層である。調査地の西側・南側ほど地表面より深い位置で遺構が検出されていることから、桃山時代の旧地形は現在よりも南西に向かって傾斜していたことが推測できる。

（３）第１次調査の成果

第１次調査では室町時代後期から江戸時代の遺構を検出するとともに、多量の遺物が出土した。調査成果の概要をまとめておく[12)]。

室町時代以前　最も古い遺物は、わずかではあるが古墳時代後期から飛鳥時代の須恵器がある。また、最も古い遺構は室町時代後期に属する。調査区西部を中心にして溝・井戸・土坑・柱穴などを検出した。柱穴は建物や柵、溝は区画溝と考えられ、集落の一部が見つかったと考えられる。柱穴列や溝は城下町の町割りとは異なり北側でやや東に振る方位をとる。調査地中央部付近には集落の東側を画する南北方向の大規模な溝があり、集落の中心部は調査地のさらに西側に拡がっていたと推定できる。桃山丘陵で室町時代の集落の発見は初めてのことである。

桃山時代　伏見城城下町の造営が行われ、現在に残る街路・街区が整備された時期である。調査区のほぼ全域で段差・溝・井戸・土坑・柱穴・竈などを検出した。段差は東から西方向へ傾斜する丘陵地を階段状に成形して平坦地を造り出したもので、南北方向に延び、検出長は 50 m以上、

高低差は 0.8 mを超える。段差下部には緩斜面の低い部分に盛り土して平坦地を造り出した整地層が拡がる。この時期には遺構数や遺物の出土量が増大し、城下町の造営と並行して土地利用の変化が起こったことがわかる。段差上部には屋敷、段差下部には南部町通に面して出入口を開く町屋が建ち並んでいた。また、段差上部の土坑・井戸からは 17 世紀前葉の遺物がまとまって出土した。

江戸時代　伏見城の廃城後、市街地が拡大・充実した時期である。調査区のほぼ全域で溝・井戸・土坑・柱穴・竈・墓地などを検出した。引き続き市街地として活況を呈していたことがわかる。北西　部では大型の竈を検出するとともに、周辺からは坩堝・鉄滓が出土したことから金属生産が行われていたことが推測できる。また、西部中央では寺院に伴う墓地の全域を調査することができた。造成の経過、埋葬施設の状況、多種多様な副葬品など江戸時代の墓制に関わる貴重な資料を得ることができた。

３．４区の調査

（１）４区の遺構（図８～ 14、図版１～３）

基本層序　調査地は北側を西楽図子通、東側を竹中町通、南側を毛利橋通、西側を南部町通に囲まれた長方形街区内の北部・中央部の広い範囲を占める。桃山丘陵の西側斜面に立地することから、北東から南西に向けて傾斜しており、現況では北側の西楽図子通と南側の毛利橋通では北側が高く約 0.7 mの高低差、東側の竹中町通と西側の南部町通では東側が高く約 2.5 mの高低差がある。

調査区は調査地北西側、第 1 次調査 1 区北西側にあたる。 1 区で検出した遺構との関連を確認するため 1 区の一部を再掘削した。

４区の基本層序は厚さ 1.0 ～ 1.4 mの盛土と次の３層に分けることができる。第 1 層はオリーブ褐色砂泥や褐色砂泥などからなる整地層で、調査区内のほぼ全域に拡がる。東部では厚さ約 10 ㎝であるが、西部に向けて徐々に厚くなり約 40 ㎝となる。 1 区第 1 層に対応する。第２層は褐色砂泥や黒褐色砂泥などからなる整地層で､調査区内のほぼ全域に拡がる。東部では厚さ約 20 ㎝で、西部に向けて少し厚くなり約 30 ㎝となる。 1 区第 1 層・第２層に対応する。第３層は暗褐色粘質土などからなる整地層で、西部の一部分で認めたにすぎない。厚さ５～ 10 ㎝である。 1 区第３層に対応する。第２層・第３層の下層は礫を多量に含む褐色粘質土などになる。部分的に緑灰色細砂の部分があるが、総じて堅く締まっており遺物を含んでいないことから地山と判断した。地山検出面は北東部が南西部よりも約 0.4 m高い。

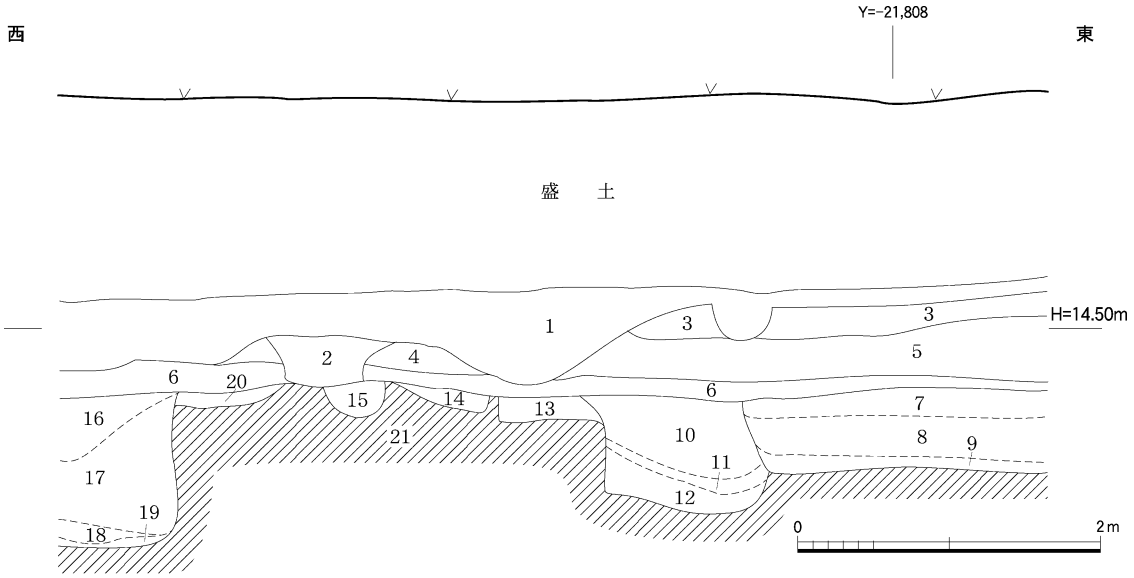
遺構の概要　検出した遺構総数は 263 基である。調査では第 1 層の下面を第 1 面、第２層の下面を第２面とした。第３層は一部分しか残っていなかったこともあり、第３層下面では遺構を認めていない。第 1 面は 18 世紀後葉以降の遺構が主体である。溝･土坑･井戸･土間などを検出した。

第２面は 16 世紀末から 18 世紀中葉の遺構が主体である。溝・土坑・井戸・石列・柱穴を検出した。調査区西部を中心に方形の土坑が目立つ。16 世紀後葉の遺構はわずかである。ここでは遺跡を理解するうえで重要と判断した遺構や特殊な構造をもつ遺構を中心に報告する。

土間17（図版２）第１面西部中央で検出した。平面形は東西4.2ｍ以上、南北約2.3ｍの長方形で、西側は調査区外となる。厚さ約 20 ㎝のにぶい黄褐色砂泥からなる整地層で、上面は直径１～２㎝の礫を含み堅く締まる。建物内部の土間と考えられる。18 世紀の遺物が出土した。西壁断面ではほぼ同じ位置に約 20 ㎝の厚さで縞状の堆積が認められることから、土間 17 の後もかさ上げを繰り返しながら同じ位置で土間が維持されたことがわかる。

土坑４（図 10、図版２）第１面北西部で検出した。平面形は直径約 0.4 ｍの円形で、深さ約 0.1 ｍである。中央に土師器壷をほぼ正立させて据えるが、上部は削平される。壷の底部には寛永通寶１枚と炭化物が堆積する。埋土は暗褐色砂泥で、18 世紀中葉の遺物がわずかに出土した。

土坑６　第１面北西部で検出した。南側は土間 17 と重複するが、土坑６の方が新しい。西側は調査区外となるが、平面形は東西 1.8 ｍ以上、南北 1.2 ｍの隅丸方形と推定できる。深さ約 0.8



1　2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥、焼土粒を少量含む、きめが細かい（土間の整地層）
2　2.5Y3/2 黒褐色泥砂、瓦を多量に含む（攪乱43）
3　2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥、φ1～2㎝の礫を少量含む、やや締まる（第１層）
4　10Y4/4 褐色砂泥、φ1～2㎝の礫をわずかに含む（第１層）
5　10YR4/4 褐色砂泥、砂質（土坑70）
6　7.5YR4/4 褐色砂泥、φ1～2㎝の礫を少量含む、やや締まる（第２層）
7　10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土、φ1～3㎝の礫を中量含む（土坑230）
8　7.5YR4/6 褐色粘質土、φ1～2㎝の礫を少量含む、炭をわずかに含む（土坑230）
9　10YR3/2 黒褐色泥土、炭をわずかに含む（土坑230）
10　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ1～3㎝の礫をわずかに含む（土坑176）
11　2.5Y3/1 黒褐色粘質土、炭・木片を中量含む（土坑176）
12　10YR4/2 灰黄褐色泥土（土坑176）
13　10YR5/6 黄褐色砂泥、φ1～3㎝の礫をわずかに含む（土坑155）
14　10YR3/4 暗褐色粘質土（土坑244）
15　2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥（溝176）
16　10YR4/6 褐色砂泥、φ1～3㎝の礫をわずかに含む、炭・焼土粒をわずかに含む（土坑186）
17　2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥、φ1～2㎝の礫をわずかに含む、炭をわずかに含む（土坑186）
18　5Y3/2 オリーブ黒色粘質土、中砂～粗砂を少量含む、炭・木片を少量含む（土坑186）
19　5Y2/2 オリーブ黒色粘土＋2.5Y4/6オリーブ褐色粘土、やや締まる（土坑186）
20　10YR3/3 暗褐色粘質土、やや締まる（第３層）
21　10YR4/6 褐色粘質土、φ1～5㎝の礫を多量に含む、堅く締まる（地山）

図８　４区北壁断面図（１：50）

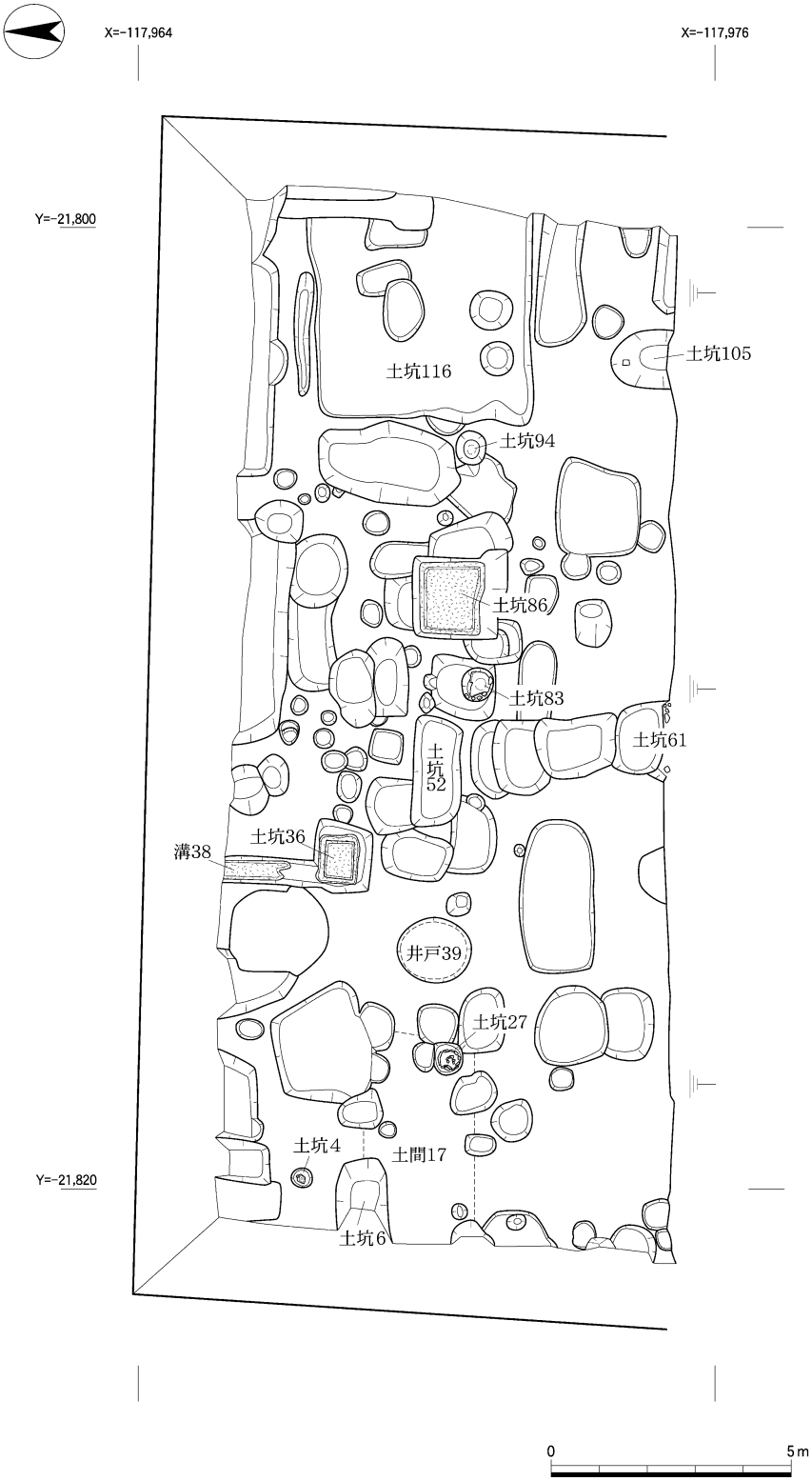


図９　４区第１面遺構平面図（１：150）

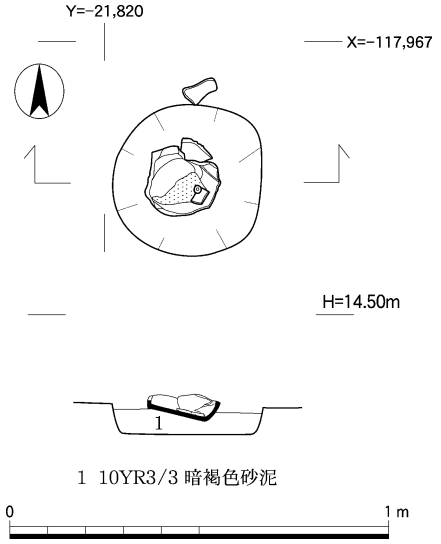
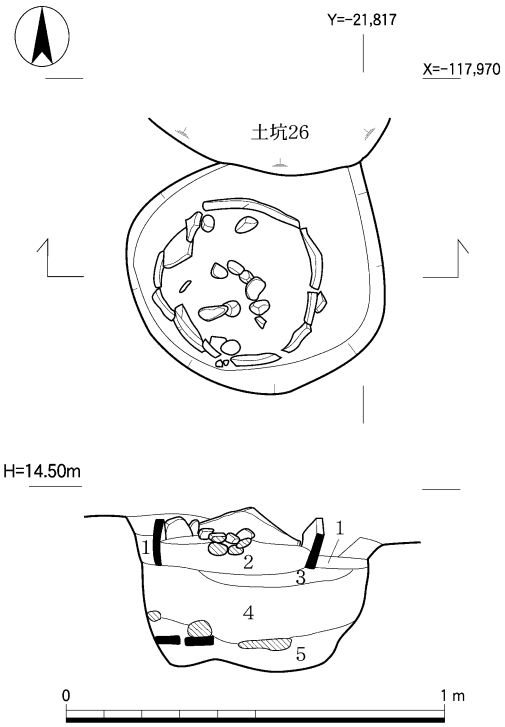


図 10　4 区土坑 4 実測図（1：20）



1　10YR4/4 褐色砂泥（炭をわずかに含む）
2　10YR3/3 暗褐色砂泥（中砂を少量含む、漆喰片をわずかに含む）
3　2.5Y5/6 黄褐色砂泥（中砂～粗砂を中量含む、φ1～2㎝の礫を少量含む、地山を盛り替えたものか）
4　10YR4/3 にぶい黄褐色泥土（炭を少量含む）
5　10YR4/4 褐色泥土

図 11　4 区土坑 27 実測図（1：20）

mである。埋土は褐色粘土のブロックを含む黒褐色砂泥で、多量の鉄滓・炭・漆喰片とともに、18 世紀後葉から 19 世紀の遺物が出土した。出土した陶磁器・瓦には熱を受けて変色したものが含まれる。

土坑 27（図 11、図版 2） 第 1 面西部中央で検出した。土間 17 を掘り込んで作られた遺構である。平面形は直径約 0.6 mの円形で、深さ約 0.4 mである。直径約 0.4 mの円形に平瓦を立て並べ、内部には大きさ数㎝の礫をまばらに入れるが、上部は削平される。埋土は暗褐色砂泥などで、多量の鉄滓とともに 19 世紀の遺物が出土した。用途・機能は不明である。

土坑 36・溝 38　第 1 面北部中央で検出した。土坑 36 は北西部が溝 38 につながる。平面形は東西約 1.5 m、南北約 1.2 mの方形で、深さ約 0.3 mである。中央に漆喰の方形枡を据える。内法は東西約 85 ㎝、南北約 60 ㎝で、漆喰の厚さは壁面で約 10 ㎝、底面で約 5 ㎝である。埋土は黒褐色粗砂で、18 世紀後葉の遺物が出土した。

溝 38 は南北方向の溝で、北側は調査区外に延び、南側は土坑 36 につながる。断面形は浅い逆台形で、長さ 2.0 m以上、幅約 0.4 m、深さ約 0.3 mである。溝状にくぼむ漆喰を据えており、漆喰上面はわずかに北に向けて傾斜する。埋土はオリーブ黒色泥砂で、18 世紀後葉の遺物が出土した。用途・機能は不明であるが、土坑 36・溝 38 は一体となる遺構と考えられる。

土坑 52　第 1 面中央部で検出した。平面形は東西約 2.4 m、南北約 0.9 mの隅丸方形で、深さ約 0.3 mである。埋土は黒褐色砂泥で、18 世紀後葉から 19 世紀中葉の遺物がまとまって出土した。

土坑 61　第 1 面南部中央で検出した。平面形は東西約 1.6 m、南北約 1.1 mの方形で、深さ約 0.9 mである。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、完形の坩堝や鉄製鋤先を含む、17 世紀後葉から 18 世紀中葉の遺物が出土した。

土坑 83（図版 2） 第 1 面中央部で検出した。平面形は直径約 0.7 mの円形で、深さ約 0.4 mで

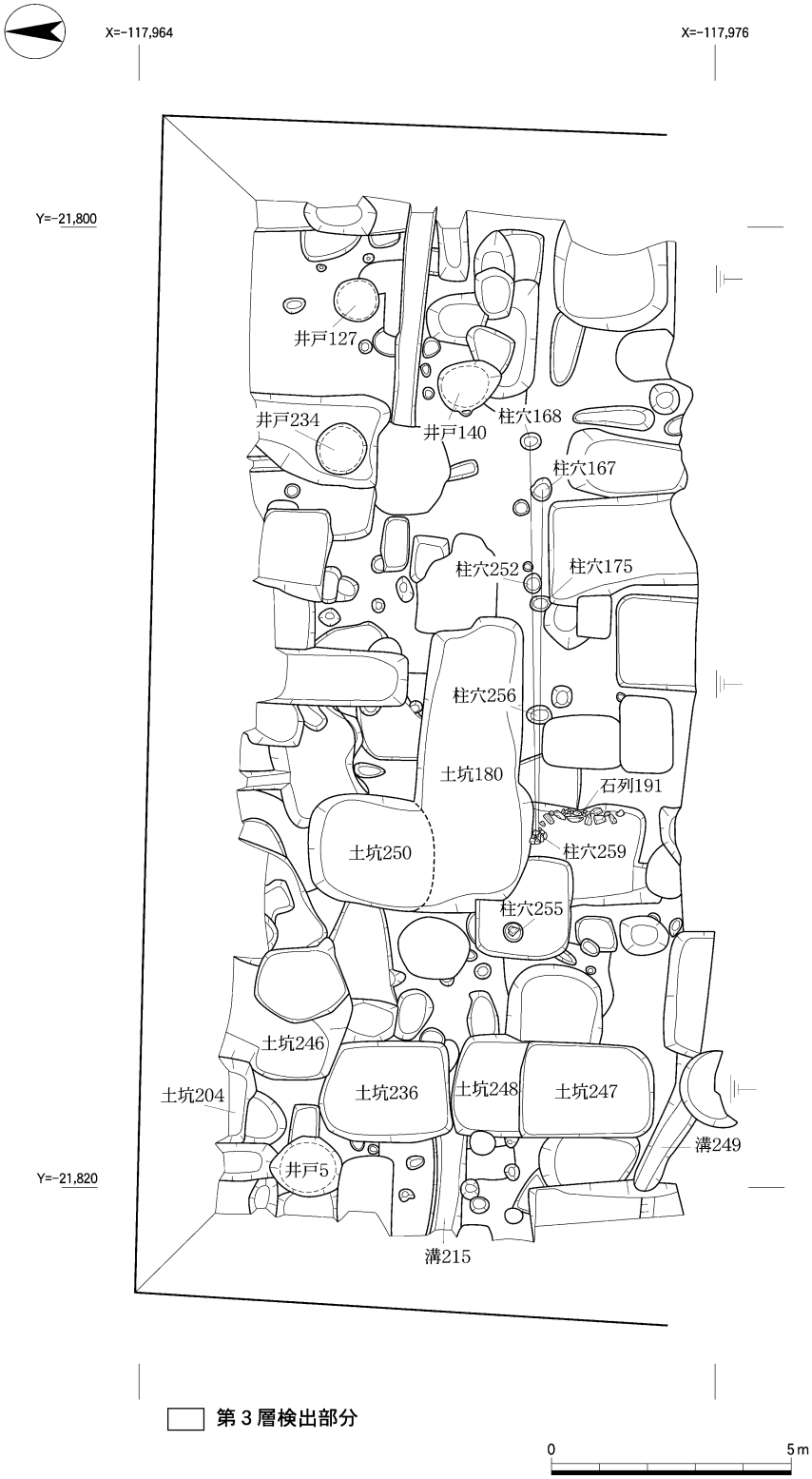


図 12　４区第２面遺構平面図（１：150）

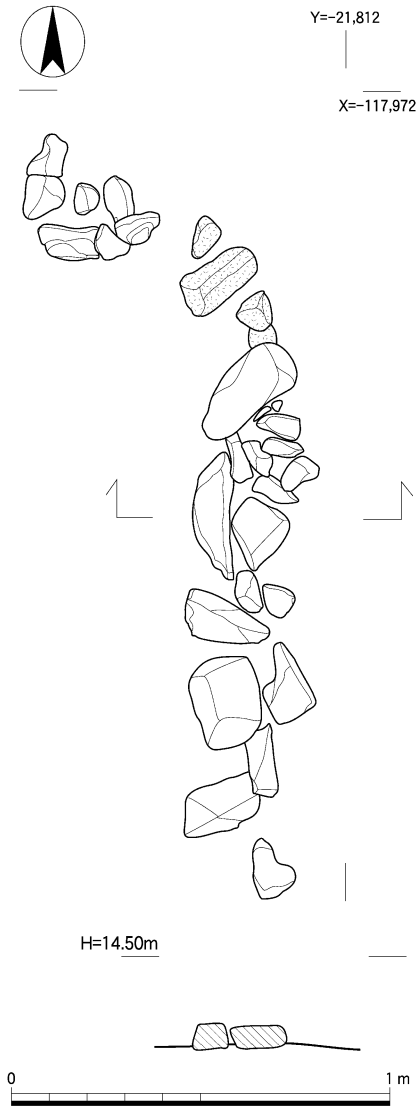


図 13　4 区石列 191 実測図（1：20）

ある。中央部に国産施釉陶器の大型甕を据える。甕の底部外面に墨書があるが、判読できない。埋土は暗褐色砂泥で、18 世紀後葉から 19 世紀中葉の遺物が出土した。

土坑 86　第 1 面中央部で検出した。平面形は東西約 1.8 m、南北約 1.9 mの方形で、深さ約 0.4 mである。中央に漆喰の方形枡を据える。内法は東西約 145 ㎝、南北約 115 ㎝で、漆喰の厚さは壁面で約 10 ㎝、底面で約 5 ㎝である。埋土はにぶい黄褐色泥砂で、18 世紀後葉から 19 世紀中葉の遺物が出土した。

土坑 94　第 1 面中央部東寄りで検出した。平面形は直径約 0.7 mの円形で、深さ約 0.3 mである。中央部に国産施釉陶器の大型甕を据える。埋土は暗オリーブ褐色砂泥で、18 世紀後葉から 19 世紀中葉の遺物が出土した。

土坑 105　第 1 面南東部で検出した。1 区第 1 面で検出した土坑 747 の北端になる。埋土は暗褐色砂泥で、18 世紀後葉から 19 世紀中葉の遺物がわずかに出土した。

土坑 116　第 1 面東部中央で検出した。東側は調査区外となるが、平面形は東西 4.5 m以上、南北約 4.7 mの方形と推定できる。深さ約 0.2 mである。埋土は暗褐色砂泥などで、18 世紀後葉から 19 世紀中葉の遺物が出土した。

井戸 39　第 1 面中央部西寄りで検出した。平面形は直径約 1.3 mの円形で、深さ 1.5 m以上である。井戸側の痕跡はなく、素掘りであった可能性がある。埋土は黄褐色粘質土で、19 世紀の遺物が出土した。

溝 215　第 2 面西部中央で検出した。東西方向の溝である。西側は調査区外へ延び、東側は土坑 236・土坑 248 に攪乱される。断面形はU字形で、長さ 2.3 m以上、幅約 0.6 m、深さ約 0.3 mである。底部は西に向けて傾斜する。埋土はオリーブ褐色砂泥で、16 世紀末から 17 世紀初頭の遺物がごく少量出土した。

溝 249　第 2 面南西部で検出した。東南東から西北西方向の溝である。約 20 度で東側がやや南に振る方位をとる。西側・東側とも土坑に攪乱されるが、東南東方向の延長で 1 区第 3 面溝 1731 につながることから一連の遺構と考えられる。断面形は逆台形で、長さ 3.0 m以上、幅 0.5 ～ 0.6 m、深さ約 0.3 mである。底部は西北西に向けて傾斜する。埋土はオリーブ褐色砂泥である。出土遺物はない。

土坑 180　第 2 面中央部で検出した。北西側は土坑 250 に接するが、ほぼ同時に埋没した状況にある。平面形は東西約 5.9 m、南北約 2.2 mの隅丸方形に復元できる。深さは東側は約 0.4 m

であるが、西側は徐々に深くなり 0.7 mとなる。南壁面では底部付近で西に向かって傾斜する地山の白色粘土層を観察できるので、この層の採集を目的とした土取穴と考えられる。埋土はにぶい黄褐色砂泥などで、中位には腐植土が堆積する。木製品を含む 17 世紀後葉から 18 世紀中葉の遺物がまとまって出土した。

土坑 250　第 2 面北部中央で検出した。南側は土坑 180 に接しており、底面はなだらかにつながる。平面形は南北約 2.6 m、東西約 2.4 mの隅丸方形で、深さ約 0.8 mである。埋土は暗灰黄色泥土などで、中位には腐植土が堆積する。木製品を含む 17 世紀後葉から 18 世紀中葉の遺物がまとまって出土した。

土坑 204　第 2 面北西部で検出した。東側は土坑 246 と重複するが、土坑 204 の方が新しい。北側は調査区外となるが、平面形は南北 0.8 m以上、東西約 1.8 mの方形と推定できる。深さ約 0.7 mである。埋土はオリーブ褐色砂泥で、18 世紀前葉から中葉の遺物が出土した。

土坑 236　第 2 面西部中央で検出した。平面形は南北約 2.8 m、東西約 2.0 mの方形で、深さ約 0.7 mである。埋土はにぶい黄色泥砂などで、多量の礫を含んでいることから地山を掘り返した土で埋め戻したと考えられる。17 世紀後葉の遺物がわずかに出土した。

土坑 247　第 2 面南西部で検出した。北側は土坑 248 と重複するが、土坑 248 の方が新しい。平面形は南北約 2.8 m、東西約 2.0 mの方形で、深さ約 0.8 mである。埋土は褐色砂泥で、17 世

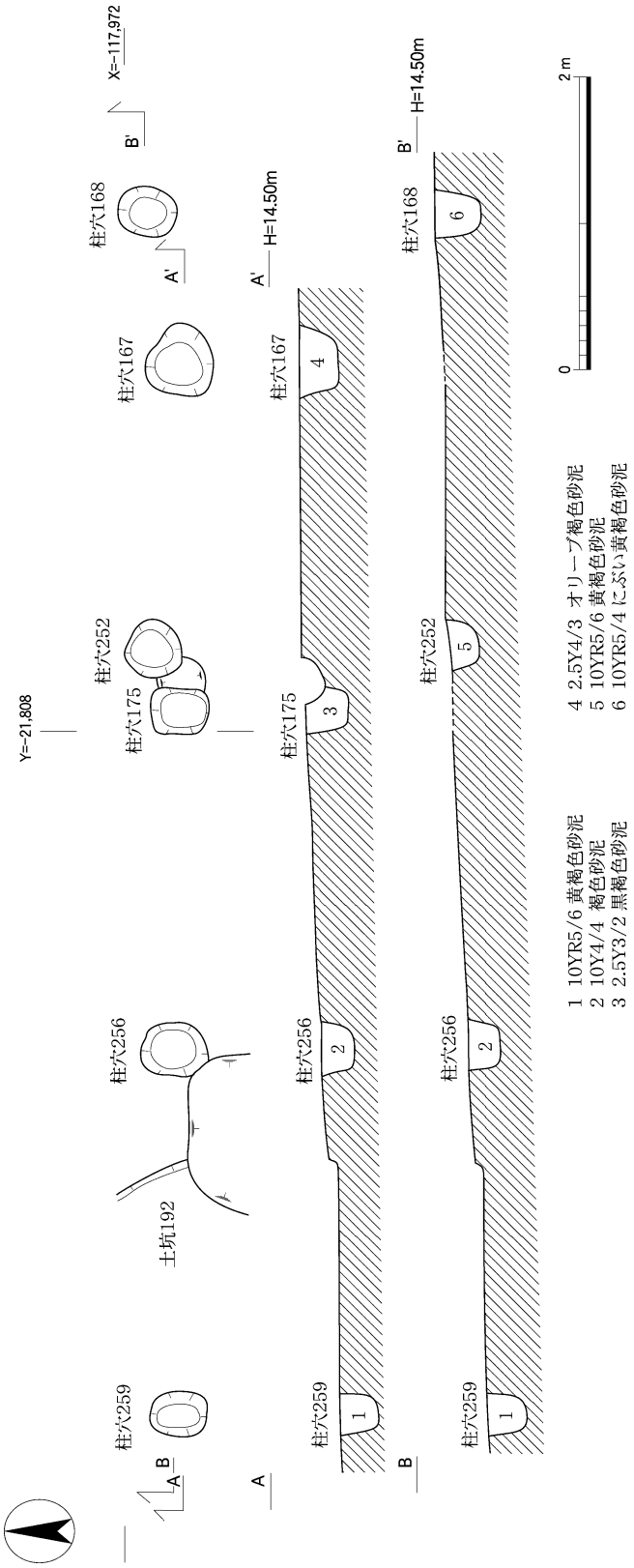


図 14　4 区柱穴 259・256・175・167・252・168 実測図（1：

紀後葉から 18 世紀中葉の遺物がまとまって出土した。

土坑 248　第２面南西部で検出した。平面形は南北 1.4 m以上、東西 2.1 mの方形に復元できる。深さ約 0.4 mである。埋土は灰黄褐色砂泥で、18 世紀前葉から中葉の遺物が出土した。土坑 204・土坑 236・土坑 247・土坑 248 はほぼ同じ大きさで南北方向に並ぶことから連続して掘られた土取穴と考えられる。

土坑 246　第２面北西部で検出した。北側は調査区外となる。平面形は不整形で、南北 2.8 m以上、東西約 3.2 mである。深さは約 0.7 ～ 0.9 mで底部には凹凸がある。埋土は底部付近には木片・炭を含むオリーブ黒色粘質土、上部にはオリーブ褐色砂泥・黄褐色粘質土などが堆積しており、西から東に向けて埋めた状況を示す。18 世紀前葉から中葉の遺物が出土した。

井戸５　第２面北西部で検出した。平面形は直径約 1.4 mの円形で、深さ 1.5 m以上である。井戸側の痕跡はなく、素掘りであった可能性がある。埋土は黒褐色砂泥で、多量の鉄滓・鞴羽口を含む 17 世紀後葉から 18 世紀中葉の遺物が出土した。

井戸 127　第２面北東部で検出した。平面形は直径約 1.0 mの円形で、深さ 1.5 m以上である。井戸側の痕跡はなく、素掘りであった可能性がある。埋土はにぶい黄褐色砂泥で、18 世紀後葉から 19 世紀中葉の遺物が出土した。第２面で検出したが、第１面に対応する遺構である。

井戸 140　第２面東部中央で検出した。平面形は直径約 1.1 mの円形で､深さ 1.5 m以上である。井戸側の痕跡はなく、素掘りであった可能性がある。埋土は暗褐色砂泥で、鉄滓・鞴羽口を含む 18 世紀前葉から中葉の遺物が出土した。

井戸 234　第２面北部中央で検出した。平面形は直径約 1.1 mの円形で､深さ 1.5 m以上である。井戸側の痕跡はなく、素掘りであった可能性がある。埋土はオリーブ褐色砂泥で、鉄滓・鞴羽口を含む 18 世紀後葉から 19 世紀中葉の遺物が出土した。第２面で検出したが、第１面に対応する遺構である。

石列 191（図 13）第２面南部中央で検出した。平面形は屈曲の不明瞭なＬ字形で、検出長は

表１　遺構概要表

時　期	４　区	５　区	６　区	７　区
室町時代	溝249	土坑16　土坑17	溝23 土坑25　土坑26	溝７
桃山時代	溝215	段差	土坑19 土間17	
江戸時代	溝38 土坑４　土坑６　土坑27　土坑36 土坑52　土坑61　土坑83　土坑86 土坑94　土坑105　土坑116　土坑180 土坑204　土坑236　土坑246 土坑247　土坑248　土坑250 井戸５　井戸39　井戸127　井戸140 井戸234 土間17 石列191 柱穴259・柱穴256・柱穴175・柱穴167 ・柱穴252・柱穴268	土坑９		溝１　溝８ 土坑２

南北約 1.8 m、東西約 0.6 mである。大きさ 10 ～ 30 ㎝の石・漆喰片を不規則に並べる。埋土に 18 世紀前葉から中葉の遺物を含む土坑上面に作られていることから、これよりも新しい。

柱穴列 259・256・175・167・252・168（図 14）第２面中央部で検出した東西方向の柱穴列である。同じ場所で２列の柱穴列が重複していることから、作り替えが行われたと考えられる。柱穴列 259･256･175･167 は、柱穴は４基で検出長は約 7.2 mである。柱穴は一部が攪乱されるが、直径 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.2 ～ 0.3 mである。柱あたりの痕跡はない。柱穴の間隔は 2.4 ～ 2.5 mである。

柱穴列 259・256・252・168 は、柱穴は４基で検出長は約 8.2 mである。柱穴は直径 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.2 ～ 0.3 mである。柱あたりの痕跡はない。柱穴の間隔は 2.5 ～ 2.9 mである。

柱穴 259・175 から 17 世紀、柱穴 167 から 18 世紀前葉から中葉の遺物が出土した。。

柱穴 255　第２面中央部西寄りの土坑底部で検出した。平面形は直径約 0.4 mの円形で、深さ約 0.1 mである。中央に大きさ約 20 ㎝の石を平坦な面を上にして据える。埋土は黄褐色砂泥である。時期を確定できる遺物は出土していない。

（２）４区の遺物（図 15・16、図版６～ 10）

遺物の概要　４区では整理用コンテナに 80 箱の遺物が出土した。出土遺物には土器類・瓦類・木製品・土製品・石製品・金属製品などの種類がある。出土遺物の大部分は土器類が占め、そのほかの種類は少ない。調査では遺構相互の重複のため新しい時期の遺構埋土に、より古い時代の遺物が混入することが多くみられた。

江戸時代後期の遺物は土坑・井戸などから多量に出土している。国産施釉陶器・国産磁器が大部分を占め、土師器・焼締陶器は少量である。国産施釉陶器の器形には椀・皿・鉢・擂鉢・鍋・土瓶・蓋・壷・甕・灯明皿など、国産磁器には椀・台付椀・皿・鉢・蓋・壷・水滴などがある。ほかの出土遺物には瓦類・土製品・石製品・金属製品などがある。瓦は桟瓦が大部分を占める。

表２　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
鎌倉時代以前	須恵器、灰釉陶器	少量		少量	０箱
室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、中国製磁器	少量		少量	０箱
桃山時代	土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、中国製磁器、瓦類	２箱	中国製磁器１点	２箱	０箱
江戸時代	土師器、焼締陶器、国産施釉陶器、国産磁器、瓦類、木製品、土製品、石製品、金属製品	92箱	土師器29点、焼締陶器５点、国産施釉陶器28点、国産磁器35点、木製品15点、土製品７点、鉄滓一括	52箱	32箱
合　計		94箱	120点（８箱）	54箱	32箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、ランク分けしたため、出土数より８箱多くなっている。

土製品では土人形・鞴羽口が目立つ。金属製品は鉄滓が多くを占め、ほかに鉄釘・煙管や針金などの銅製品などがある。18 世紀後葉以降に属する。

江戸時代中期の遺物は土取穴からの出土が多い。土師器・焼締陶器・国産施釉陶器・国産磁器が大部分を占める。土師器には皿・焙烙・火鉢・壷など、焼締陶器には擂鉢・壷・甕など、国産施釉陶器には椀・皿・鉢・擂鉢・壷・甕など、国産磁器には椀・皿・鉢・蓋・壷などがある。ほかの出土遺物には瓦類・木製品などがある。17 世紀後葉から 18 世紀中葉に属する。

桃山時代から江戸時代前期、室町時代後期の遺物はごく少量で、多くは新しい時代の包含層や遺構から混入遺物として出土した。土師器の皿・焙烙、瓦器の火鉢、焼締陶器の擂鉢・壷・甕、国産施釉陶器の椀・皿・鉢、中国製磁器の椀などがある。16 世紀後葉から 17 世紀中葉に属する。

これらより古い時期の遺物は、古墳時代後期から奈良時代に属する須恵器の杯・壷・甕、灰釉陶器の壷、室町時代前期から中期に属する土師器の皿、瓦器の椀・鍋・釜がわずかながら新しい時代の包含層や遺構から混入遺物として出土した。

土坑 180 出土土器（図版６・７）土師器の皿（１～ 11)・焙烙（12)・蓋（13)・壷・火鉢（14)、瓦器の火鉢、焼締陶器の擂鉢（15)・壷・甕、国産施釉陶器の椀（16 ～ 22)・鉢（23・24)・擂鉢・壷（25)・甕・灯火具（26)、国産磁器の椀（27 ～ 34)・台付椀・皿（35・36)・蓋（37)・壷（38）などがある。

土師器の皿には小型皿（１・２)・中型皿（３・４)・大型皿（５～ 10)・特大型皿（11）がある。大型皿・特大型皿底部内面には圏線がめぐる。12 は内弯気味の体部から口縁部が屈曲して外上方に開き、端部に平坦な面を作る。内外面とも丁寧に仕上げ、外面全面に薄く煤が付着する。13 は平坦な天井部から口縁部が外下方に垂下し、端部を丸くおさめる。天井部外面中央には低い円柱形のつまみが付く。内外面とも横方向のナデである。14 は破片から推定復元した。平底の底部にハ字形に開く高い高台が付く。体部は底部から内弯気味に立ち上がり、口縁部は内弯して端部を丸くおさめる。表面の損傷のため調整の詳細は不明である。内面には煤が付着する。

15 は平底の底部から体部が外上方に開く。口縁部はやや肥厚して外面に２条の沈線がめぐる。内外面とも横方向のナデである。内面には７本１組の擂目を施し、使用により摩耗する。信楽産である。焼締陶器にはほかに備前産・丹波産がある。

16 は白色釉、22 は緑色釉の丸椀である。17 ～ 21 は白色の刷毛目を渦巻き状に施して飾る。24 は口縁端部が屈曲する深い鉢で内面に蔦を流麗に描く。20 ～ 24 は肥前産である。25 は外面に褐色釉を施す茶入れである。美濃産である。26 は土師質の灯火具で緑彩・透明釉を施す。

国産磁器は大部分が染付で丸椀が多い。草花・山水・幾何学文など様々な文様を描く。36・38 は文様の簡略化が進む。27 は型紙摺絵で花、31 は印判で菊と三巴を描く。37 は白磁の蓋である。そのほかわずかではあるが青磁皿・壷がある。いずれも肥前産である。17 世紀後葉から 18 世紀中葉に属する。

土坑 247 出土土器（図版７） 土師器の皿（39 ～ 45)・焙烙（46・47)、瓦器の火鉢・灯火具、焼締陶器の擂鉢（48)・盤・壷・甕、国産施釉陶器の椀（49 ～ 52)・皿・鉢（53・54)・擂鉢・壷・

甕、国産磁器の椀（55・56）・台付椀・皿（57）・壷、中国産磁器の椀（58）がある。

土師器の皿には小型皿（39・40）・中型皿（41・42）・大型皿（43 ～ 45）がある。中型皿は丸みが強い。大型皿底部内面には圏線がめぐる。46・47 は半球形の体部から口縁部が屈曲して外上方に開く。46 は端部をつまみ上げ、47 は平坦な面を作る。46 の方が古い特徴を示す。ともに外面全面に薄く煤が付着する。

48 は体部が外上方に開き、口縁部は肥厚する。口縁部内外面は横方向のナデ、体部外面は指圧痕が強く残る。内面には 7 本 1 組の擂目を施す。丹波産の可能性が高い。

49 は小型椀、50 は長石釉を施す丸椀でともに美濃産である。52・53 は灰釉を施し、54 はいわゆる絵唐津の大鉢で、いずれも唐津産である。

国産磁器は大部分が染付で丸椀が多く、文様は簡潔なものが多い。そのほかわずかではあるが青磁椀・香炉がある。これらは肥前産である。17 世紀後葉から 18 世紀中葉に属する。なお、58 は中国製青花で外面に唐子を描く。漳州窯系の製品で 17 世紀前葉に属する。中国製青花は景徳鎮窯系の製品の破片もある。

土坑 52 出土土器（図版８）土師器の皿・焙烙・壷、焼締陶器の擂鉢、国産施釉陶器の椀・皿・鉢・擂鉢・鍋（61・62）・土瓶・蓋（63・64）・壷・甕・灯明皿（59・60）・水滴（65）、国産磁器の椀（66 ～ 72）・皿（73）・鉢・蓋（74 ～ 76）・壷（77）などがある。国産施釉陶器の鍋・土瓶・壷、国産磁器の椀が多い。

61・62 は型合わせ成形の把手が付き、61 は笹、62 は人物と花を表現する。61 は 63 とセットになる。64 は川面と紅葉の意匠である。図示していないが環状の把手が 2 箇所に付く褐色釉を施した鍋もある。65 は型合わせ成形で菊の花弁・葉を表現し、外面に緑色釉を施す。

国産磁器は大部分が染付で、草花・山水・幾何学文などの文様を描く。67 は外面の一方に文字を記す。71 は高台内に赤絵で記号を描き、また、焼継ぎによる補修がある。75 は内面・外面に雲・龍を描く意匠である。77 は瓶子形の小型壷である。そのほかわずかではあるが、青磁皿・色絵皿がある。いずれも肥前産である。18 世紀後葉から 19 世紀中葉に属する。

土坑 116 出土土器（図版９）土師器の皿（78 ～ 80）・小型鉢（81）・焙烙（82）・火鉢・小型壷（83）、焼締陶器の壷（84）・鉢（85）・擂鉢（86）、国産施釉陶器の椀（87）・鉢（88・89）・擂鉢・鍋（90）・土瓶・蓋・壷・甕、国産磁器の椀（91 ～ 95）・皿・蓋（96）・壷（97・98）・水滴などがある。国産施釉陶器の椀・鍋、国産磁器の椀が多い。

土師器の皿には小型皿（78）・中型皿（79）・大型皿（80）がある。大型皿底部内面には鋭い圏線がめぐる。82 は底部から口縁部が内弯気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。口縁部・底部内面は横方向のナデ、底部外面はケズリである。外面には薄く煤が付着する。81・83 はともにロクロ成形で、横方向のナデで仕上げる。

84 は平底の小型壷で、体部は底部から内弯して立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁端部に強い横方向のナデを施し段を作る。体部外面下部はケズリ、底部外面に板の圧痕がのこる。信楽産である。85 は平底の鉢で、体部・口縁部はわずかに外傾して外上方に開き、端部は丸くおさめる。

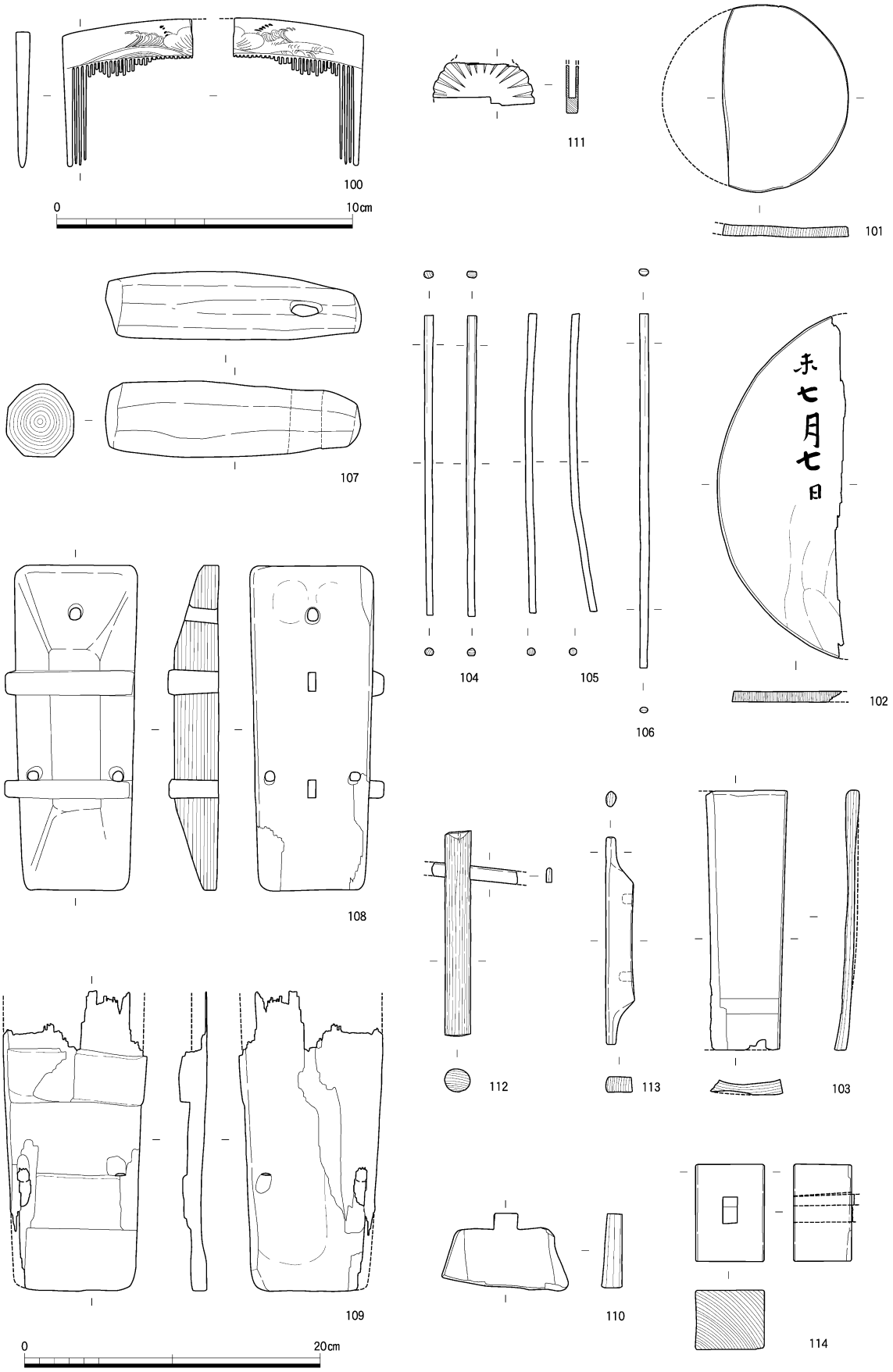


図 15　4区出土木製品実測図（1：2・1：4）

内外面とも横方向のナデで、底部外面に板の圧痕がのこる。産地は不明である。86 は上底気味の底部から体部が外上方に開く。口縁部は肥厚して縁帯状となり、内外面に凹線がめぐる。体部外面はヘラケズリののちナデ、底部外面に板の圧痕がのこる。内面には 10 本 1 組の鋭い擂目を施す。関西系の製品である。

87 は筒形椀で外面に梅を描く。京都産と推定できる。88 は小さく屈曲しながら開く鉢で外面に松を描く。89 はやや大ぶりである。90 は小型の鍋で内外面に鉄釉を施し、底部外面には 3 方に小さな突起が付く。内面には目痕が残る。擂鉢は薄く鉄釉を施す信楽産である。

国産磁器は大部分が染付で丸椀が多い。95 は高い高台をもち、体部が外上方に開く、いわゆる広東椀である。いずれも草花や樹木を描く。92 は印判と手描きを併用する。96 は青磁染付の蓋である。70 は瓶子形の小型壷、71 は口縁部が欠損する扁平な壷である。そのほかわずかではあるが、青磁皿・色絵皿がある。いずれも肥前産である。18 世紀後葉から 19 世紀中葉に属する。

瓦類　瓦類には軒桟瓦・桟瓦・軒丸瓦・丸瓦・軒平瓦・平瓦・道具瓦のほか枡がある。

軒桟瓦には滴水瓦状に瓦当下部に突起をもつものがあり、瓦当文様では中心に扇形・橘形の文様を表現するものが多い。軒丸瓦・軒平瓦は少ない。軒丸瓦の瓦当文様はすべて巴文、軒平瓦の瓦当文様はすべて唐草文である。なお、今回の調査では金箔瓦は出土していない。道具瓦には鳥衾・菊丸瓦などがある。

木製品（図 15、図版 10）　大部分が土坑 180・土坑 250 の腐植土を伴う層から出土した。隣接する遺構であり、出土遺物の時期も共通する。木製品には漆器・箸（104 ～ 106）・曲物（101・102）・桶（103）・下駄（108 ～ 110）・櫛（100）・木槌（107）・加工痕のある部材（111 ～ 114）・端材・焼材・檜皮などがある。樹種の同定は実施していない。

漆器には椀・箱がある。椀の塗りは内面が赤色・外面が黒色、内外面とも赤色がある。後者は外面に黒色の漆で三つ星・幾何学文を描く。箱の塗りは内外面とも黒色である。

104 ～ 106 は箸で、長さ・太さには差異がある。長軸方向に加工し、端面を切り落とす。104・105 は形状が共通しており一組のものである。104・106 の断面は基部が丸みをもつ半円形・先端部が円形、105 の断面は基部・先端部とも円形である。

101・102 は曲物の底板の破片である。102 には「未七月七日」の墨書が薄くのこる。103 は桶の側板片である。内面に底板の圧痕、外面に箍で締めた痕跡がのこる。

108 は差し歯下駄である。平面形は先端が幅広の方形で、下面は長方形の面を作る。下面の浅い溝と枡穴に台形の歯を嵌める。上面には足指の圧痕がのこる。110 は枡を作りだした差し歯下駄の歯である。109 は一木作りの下駄である。かなり損傷しているが、平面形は方形で隅部を丸くおさめる。歯は大部分がすり減っている。

100 は横櫛の破片である。棟は緩やかな弧をなす。歯はほとんど欠落するが、細かく 28 本以上を挽き出す。側面は歯の部分まで黒色の漆を塗り、両面に金蒔絵で細密な梅・波頭を描く。

107 は木槌の体部である。基部がすぼまるやや不整形な円柱形で、基部近くに柄を差し込む長円形の穿孔がある。長軸方向に粗く加工して成形する。

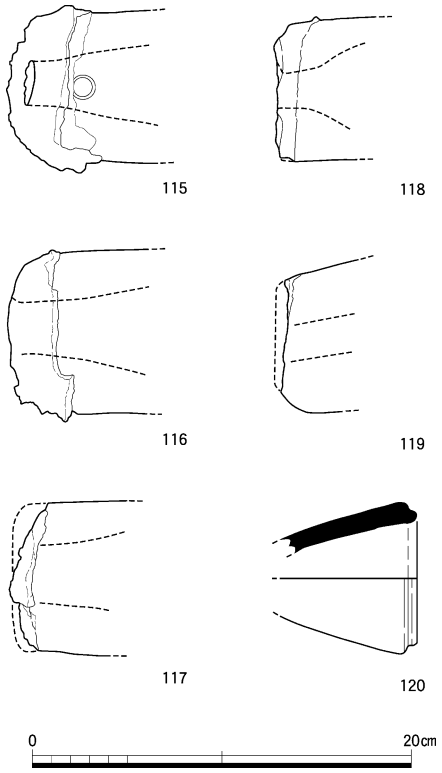


図 16　4 区出土土製品実測図（1 ： 4）

111 は欠損部が多いが、平面形は半円形と推定できる。円弧に沿って 11 弁の花弁状の彫刻を施し、円弧側は中空となる。112 は棒状の部材を枘孔で組み合わせたものである。円柱状の部材は長軸方向に細かく加工し、両端を切り落とす。113 は両端が細くなる棒状のものである。側面の 2 箇所に浅い穴を加工する。114 は角材に枘穴を開け 2 本の棒状の部材を挿入したものである。棒状の部材の 1 つは一端が細くなる楔形である。111 ～ 114 はいずれも用途不明である。

100・102・104 ～ 106・109・110・112・113 は土坑 180、101・103・107・108・111・114 は土坑 250 から出土した。いずれも 17 世紀後葉から 18 世紀中葉に属する。

土製品（図 16、図版 9・10）土製品には土人形・土鈴・泥面子・ミニチュア土器・焼塩壷・窯道具・坩堝（99）・鞴羽口（115 ～ 120）・土管などがある。

土人形には布袋・西行法師などの人物、狐・牛・馬などの動物、器財などがある。中実のものは少量で、大部分は中空で型合わせ成形で製作される。ほとんどが土師質で、瓦器質はごく少量である。土師質の土人形には薄く釉薬を施すものや彩色がのこるものがある。

ミニチュア土器には土師質・磁器質のものがある。土師質のものには薄く釉薬を施すものが多い。磁器質のものはいずれも型成形である。ままごと道具の可能性が高い。

窯道具は円盤形をしており片面の 3 方に小さく短い突起がある。

坩堝は少量が出土したのみである。99 は土坑 61 から出土した完形品である。体部に丸みをもつ直口壷状で、口縁部は内傾し端部は丸くおさめる。体部中央のやや高い位置に直径約 2 ㎝の穿孔があり、反対側外面には直径約 2 ㎝、深さ約 1 ㎝の円形の穴がある。体部は穿孔と穴を長軸としてやや扁平な形態をとる。成形は 2 段積み成形で、口縁部内面に横方向のナデがある。外面は全面が高熱のため溶融し、特に下半部に著しい。17 世紀後葉から 18 世紀中葉に属する。

鞴羽口は調査区各所から出土した。115 ～ 119 は先端部がすぼまる円筒形で、基部は欠損する。炉に取り付く先端部は高熱のため溶融・変色し、鉄滓が付着する。117 ～ 119 は鉄滓とともに先端部が欠損する。外面はナデで調整し、115 ～ 118 は部分的に薄く粘土が付着する。115 ～ 118 の穿孔は先端面に直交し、先端部がすぼまる形状をとる。118 は極端に細くなる。119 の穿孔は先端面に対して鋭角になる。115 は先端部外面に「○」の刻印がある。120 は焼塩壷の底部を刳り抜いて転用したものである。116・117 は土坑 116 から出土した。18 世紀後葉から 19 世紀中葉に属する。

このほか焼土塊や被熱した陶磁器・瓦が鉄滓・鞴羽口に伴って出土している。

石製品　砥石・硯・石臼などがある。いずれも破片で、石材は砥石・硯は粘板岩、石臼は花崗岩である。

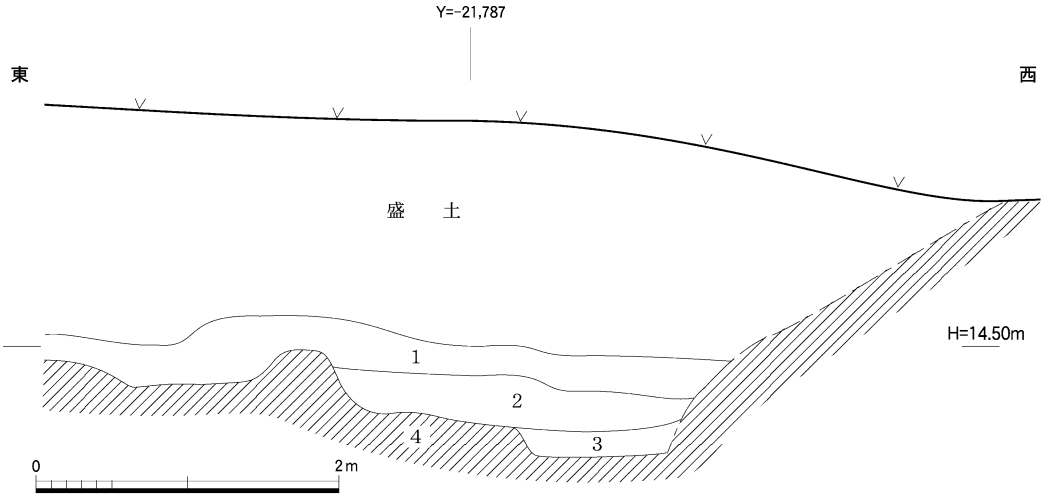
金属製品（図版 10）鉄製鋤先・鉄釘・不明鉄製品、銅銭・煙管・銅匙・銅火箸・銅針金・銅釘・銅鋲・Ｌ字形銅金具・不明銅製品などがある。

鉄製鋤先は土坑 61 から出土した。完形品で、長さ約 36 ㎝、幅 14 ㎝である。刃先はＵ字形に尖り、基部は２股に分かれ、ソケットの部分には柄の木質がのこる。不明鉄製品には板状のもの、棒状のものがある。

銅銭はすべて寛永通寶である。煙管には雁首・吸口がある。銅針金は巻き付けた形状をのこすものが多い。不明銅製品には円盤形・筒形・板状・棒状のものがある。

これらの金属製品のほかに鉄滓・銅滓がある。銅滓はわずかしか出土していない。鉄滓は調査区のほぼ全域の遺構・包含層から出土しており、特に井戸５・土坑６・土坑 27 など土間 17 周辺の遺構からまとまって出土した。形状は様々で国産磁器椀・桟瓦・石を取り込んで固まったものや緩やかに弯曲する球面をもつものがある。後者は容器の底部に溜まったまま固まり、廃棄されたことがわかる。

その他の出土遺物　棒状骨角製品・ガラス瓶・ガラス棒・漆喰片・炭片・種子・貝殻などがある。ガラス瓶はうすい褐色を呈するワインボトルである。種子はモモ、貝殻はアワビ・ハマグリなどがある。



1　7.5YR2/1 黒色泥土、コンクリート・レンガ片、φ1～5㎝の礫を中量含む（工場建設に伴う整地土）
2　10YR4/4 褐色砂泥、φ2～3㎝の礫をわずかに含む（土坑９）
3　10YR3/4 暗褐色砂泥、中砂～粗砂を中量含む（土坑９）
4　2.5Y4/2 暗灰黄色粘質土、φ1～2㎝の礫を少量含む、堅く締まる（地山）

図 17　５区南壁断面図（１：50）

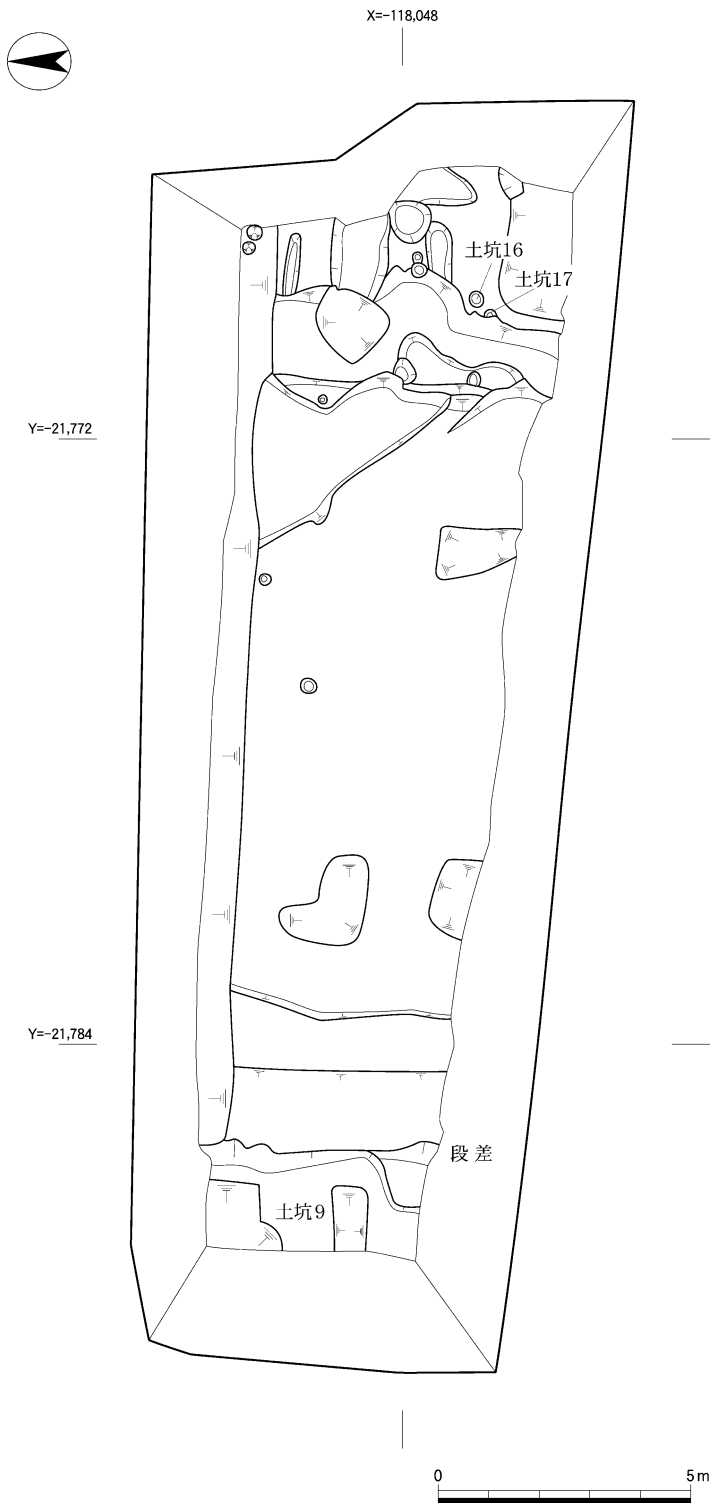


図 18　５区遺構平面図（１：150）

４．５区の調査

（１）５区の遺構（図 17・18、図版３）

基本層序　調査区は調査地南東側、第１次調査２区南側・３区南東側にあたる。５区は大部分が近代以降の著しい攪乱を受け、地山まで削平されている。このような状況により基本層序が確認できた部分は一部にすぎない。

西部では厚さ約 1.5 ｍの盛土の下に厚さ約 20 ㎝の工場建設に伴う整地層が拡がる。西端では下層に土坑９の埋土とした褐色砂泥・暗褐色砂泥が堆積する。これらは後述する段差を埋め立てた江戸時代後期の包含層である。整地層の下層は礫を含む暗灰黄色粘質土となる。堅く締まっており遺物を含んでいないことから地山と判断した。また、東部では包含層はなく、厚さ約 1.1 ｍの盛土の下は地山の暗灰黄色粘質土・にぶい黄褐色粘質土となる。

遺構の概要　検出した遺構総数は 20 基である。大部分が削平されていたため、盛土・工場建設に伴う整地層下面の１つの面で各時代の遺構調査を行った。溝・土坑を検出した。地山検出面は東部が西部よりも約 0.9 ｍ高いが、これは西部がより深くまで削平されたためである。遺物の出土量が少ないこともあり、時代を確定できる遺構は少ない。

段差・土坑９　西部で検出した。北側は３区で検出した段差につながり、南側は調査区外に延びる。検出長は約 4.8 ｍである。２段に分かれて地山を削り込んで成形しており、高低差は約 0.7

mである。伏見城城下町造営にあたって傾斜する地形を階段状に成形して平坦地を造り出した痕跡と考えられる。土坑９とした埋土は段差を埋め立てたもので、19 世紀の遺物が出土した。

土坑 16　東部で検出した。平面形は直径約 0.2 mの円形で、深さ 0.1 mである。埋土はオリーブ褐色泥土で、室町時代の遺物がわずかに出土した。

土坑 17　東部で検出した。西側は攪乱を受けるが、平面形は直径約 0.2 mの円形に復元できる。深さ約 0.1 mである。埋土はオリーブ褐色泥土で、室町時代の遺物がわずかに出土した。

（２）５区の遺物

５区は検出遺構が少ないため遺物の出土量が少ない。したがって、５区の遺物については概要を記載するにとどめることとする。

５区では整理用コンテナに２箱の遺物が出土した。出土遺物には土器類・瓦類・土製品などの種類がある。出土遺物の大部分は土器類が占め、そのほかの種類は少ない。

土器類には土師器・瓦器・焼締陶器・国産施釉陶器・国産磁器がある。17 世紀後葉以降に属するものがほとんどで、16 世紀後葉から 17 世紀中葉のものは土師器皿・瓦器鍋をごくわずか認めたにすぎない。17 世紀後葉以降の土器類は国産施釉陶器・国産磁器が大部分を占めており、器形は国産施釉陶器には椀・皿・鍋・土瓶・蓋・壷・甕など、国産磁器には椀・皿・鉢・蓋・壷などがある。そのほかには土師器の火鉢・壷がある。瓦類には桟瓦・塼、土製品には土人形がある。

５．６区の調査

（１）６区の遺構（図 19・20、図版４）

基本層序　調査区は調査地西側、第１次調査１区西側北寄りにあたる。１区で検出した遺構と

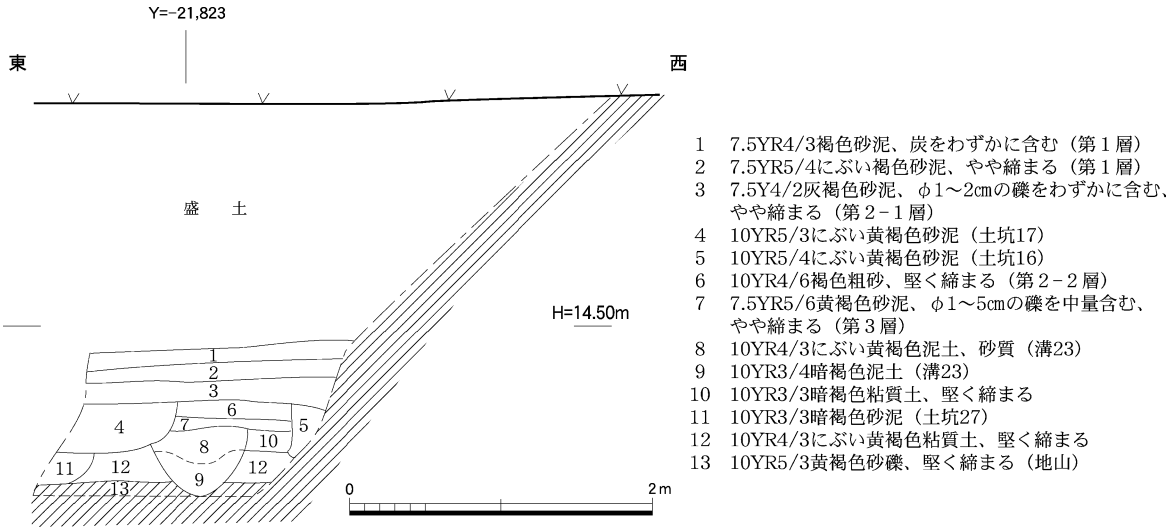


図 19　６区南壁断面図（１：50）

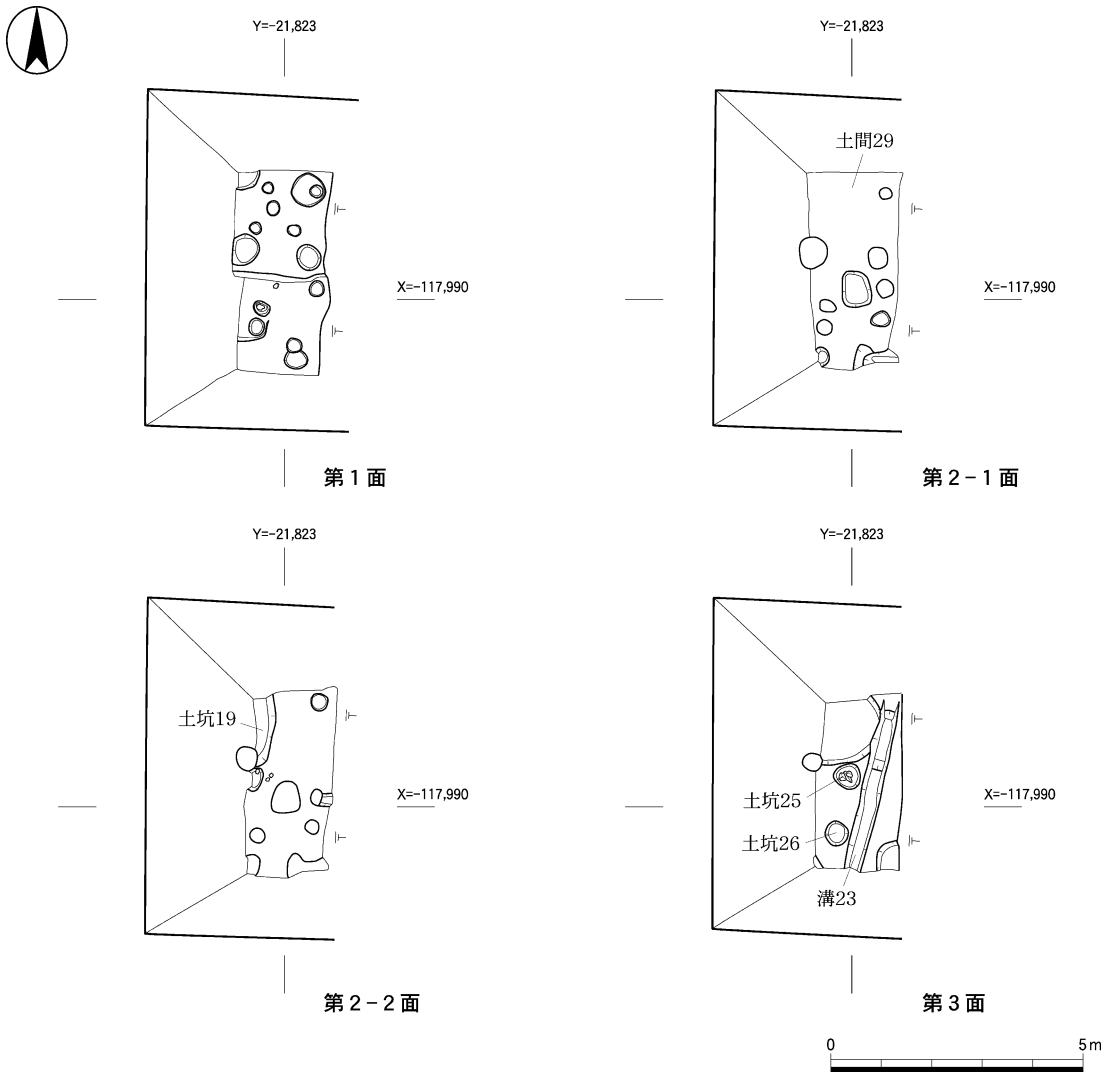


図 20　６区遺構平面図（１：150）

の関連を確認するため１区の一部を再掘削した。

６区の基本層序は厚さ約 1.6 mの盛土と次の４層に分けることができる。第１層は厚さ約 20 ㎝の褐色砂泥やにぶい黄褐色砂泥からなる整地層である。１区第１層に対応する。第２- １層は厚さ約 10 ㎝の灰褐色砂泥、第２- ２層は厚さ約 10 ㎝の褐色粗砂からなる整地層である。いずれもよく締まっている。第２- １層・第２- ２層としたのは、１区第２層に対応する層序を６区では２段階に細分して調査したためである。第３層は厚さ約５㎝の黄褐色砂泥からなる整地層である。１区第３層に対応する。第３層の下層は暗褐色粘質土・にぶい黄褐色粘質土が堆積する。堅く締まっており遺物を含んでいないが、さらに下層の黄褐色砂礫・黄褐色粘質土をブロック状に含んでいることから人為的な堆積層の可能性がある。にぶい黄褐色粘質土の下層は黄褐色砂礫で、確実な地山である。

遺構の概要　検出した遺構総数は 29 基である。調査では第１層の下面を第１面、第２- １層の下面を第２- １面、第２- ２層の下面を第２- ２面、第３層の下面を第３面とした。１区第２面に対応するのは第２- ２面である。第１面は 17 世紀以降の遺構が主体である。大小の土坑・柱穴を検

出したが、まとまりはない。第２- １面は 17 世紀の遺構が主体である。土坑・土間を検出した。第２- ２面は 16 世紀末から 17 世紀初頭の遺構が主体である。土坑を検出した。第３面は 16 世紀後葉の遺構が主体である。溝・土坑を検出した。なお、黄褐色砂礫上面でも遺構検出を行ったが、浅いくぼみを認めたのみで顕著な遺構はない。ここでは遺跡を理解するうえで重要と判断した遺構を報告する。

土間 29　第２- １面で検出した。北側・西側は調査区外となる。南はＸ =-117,988 ～ -117,989 付近にまで拡がるが、輪郭は不明瞭である。直径１～２㎝の礫を含む厚さ約５㎝の堅く締まった砂泥層である。建物内部の土間・通路の可能性が考えられる。17 世紀前葉の遺物が出土した。

土坑 19　第２- ２面で検出した。北西端で検出したため、北側・西側は調査区外となる。平面形は南北 1.4 m以上、東西 0.4 m以上の楕円形と推定できる。深さ約 0.2 mである。埋土は黄褐色砂泥で、16 世紀末から 17 世紀初頭の遺物が出土した。

溝 23　第３面で検出した。北北東から南南西方向の溝である。約 15 度で北側がやや東に振る方位をとる。北側は北壁近くで途切れ、南側は調査区外へ延びる。断面形は逆台形で、長さ 3.2 m以上、幅約 0.4 m、深さ約 0.2 mである。底部は凹凸があるが、南南西に向けて傾斜する。埋土は暗褐色泥土で、16 世紀後葉の遺物が出土した。

土坑 25・土坑 26　第３面で検出した。溝 23 の西側に接する位置に並ぶ。ともに平面形は直径約 0.5 mの円形で､深さ約 0.2 mである。土坑 25 の中央には大きさ 10 ～ 20 ㎝の石を３個据える。埋土は灰黄褐色砂泥で、土坑 26 から室町時代の遺物がわずかに出土した。

（２）６区の遺物

６区は調査面積が狭いため遺物の出土量が少ない。したがって６区の遺物についても概要を記載するにとどめることとする。

６区では整理用コンテナに２箱の遺物が出土した。出土遺物には土器類・瓦類・石製品・金属製品・植物遺体などの種類がある。出土遺物の大部分は土器類が占め、そのほかの種類は少ない。土器類には土師器・瓦器・焼締陶器・国産施釉陶器・国産磁器・中国磁器があり、16 世紀後葉から 17 世紀中葉に属するものがほとんどを占める。16 世紀後葉の土器類には土師器の皿、瓦器の鍋・釜、焼締陶器の擂鉢・甕、中国製青磁椀・白磁椀がある。16 世紀末から 17 世紀中葉の土器類には土師器の皿・焙烙・鍋、瓦器の火鉢、焼締陶器の擂鉢・壷、国産施釉陶器の椀・皿・鉢・壷・甕がある。また、わずかに古墳時代後期から奈良時代に属する須恵器の杯身・壷・甕が新しい時代の遺構や包含層に混入していた。

瓦類には丸瓦・平瓦、石製品には砥石、金属製品には鉄釘・銅銭、植物遺体には木片があるが、いずれも少ない。ただし、銅銭は第１層のにぶい褐色砂泥から寛永通寶が 10 枚まとまって出土した。

６．７区の調査

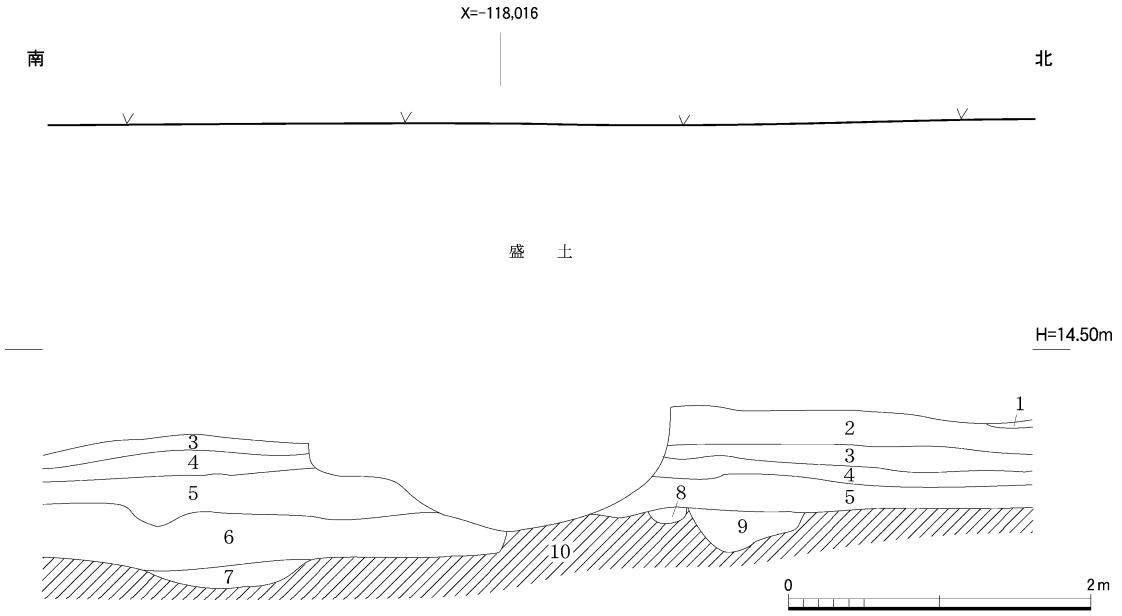
（１）７区の遺構（図 21 ～ 23、図版５）

基本層序　調査区は調査地西側、第１次調査１区西側南寄りにあたる。１区で検出した遺構との関連を確認するため１区の一部を再掘削した。

７区の基本層序は厚さ約 2.0 ｍの盛土と次の２層に分けることができる。第１層は厚さ約 10 ㎝の褐色砂泥からなる整地層である。１区第１層に対応する。第２層は厚さ約 30 ～ 40 ㎝の暗灰黄色泥土・褐色粘質土からなる整地層である。１区第２層に対応する。７区では第２層の下層に第３層はなく浅黄色粘土となる。堅く締まっており遺物を含んでいないことから地山と判断した。

遺構の概要　検出した遺構総数は８基である。調査では第１層の下面を第１面、第２層の下面を第２面とした。また、１区第３面の検出遺構にあわせて第３面の遺構をまとめた。第１面では遺構を検出していない。第２面は 17 世紀以降の遺構が主体である。溝・土坑を検出した。第３面は 16 世紀後葉の遺構が主体である。ここでは遺跡を理解するうえで重要と判断した遺構を報告する。

溝１　第２面で検出した。東西方向の溝である。東側は１区で検出した溝 1453 につながり、西側は調査区外に延びる。断面形は浅い逆台形で、長さ 1.6 ｍ以上、幅 0.4 ～ 0.7 ｍ、深さ約 0.2



1　10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、砂質
2　10YR3/3 暗褐色砂泥、炭をわずかに含む
3　10YR4/4 褐色砂泥、φ1～2㎝の礫を少量含む、やや締まる（第１層）
4　2.5Y4/2 暗灰黄色泥土（第２層）
5　10YR4/4 褐色粘質土、φ1～3㎝の礫を少量含む（第２層）
6　2.5Y4/1 黄灰色粘土（溝８）
7　6に7.5Y6/1灰色粘土がブロックで混じる（溝８）
8　7.5YR4/4 褐色粘質土
9　10YR4/2 灰黄褐色粘土、φ1～2㎝の礫をわずかに含む、粗砂を少量含む（溝１）
10　2.5YR7/4 浅黄色粘土（地山）

図 21　７区西壁断面図（１：50）

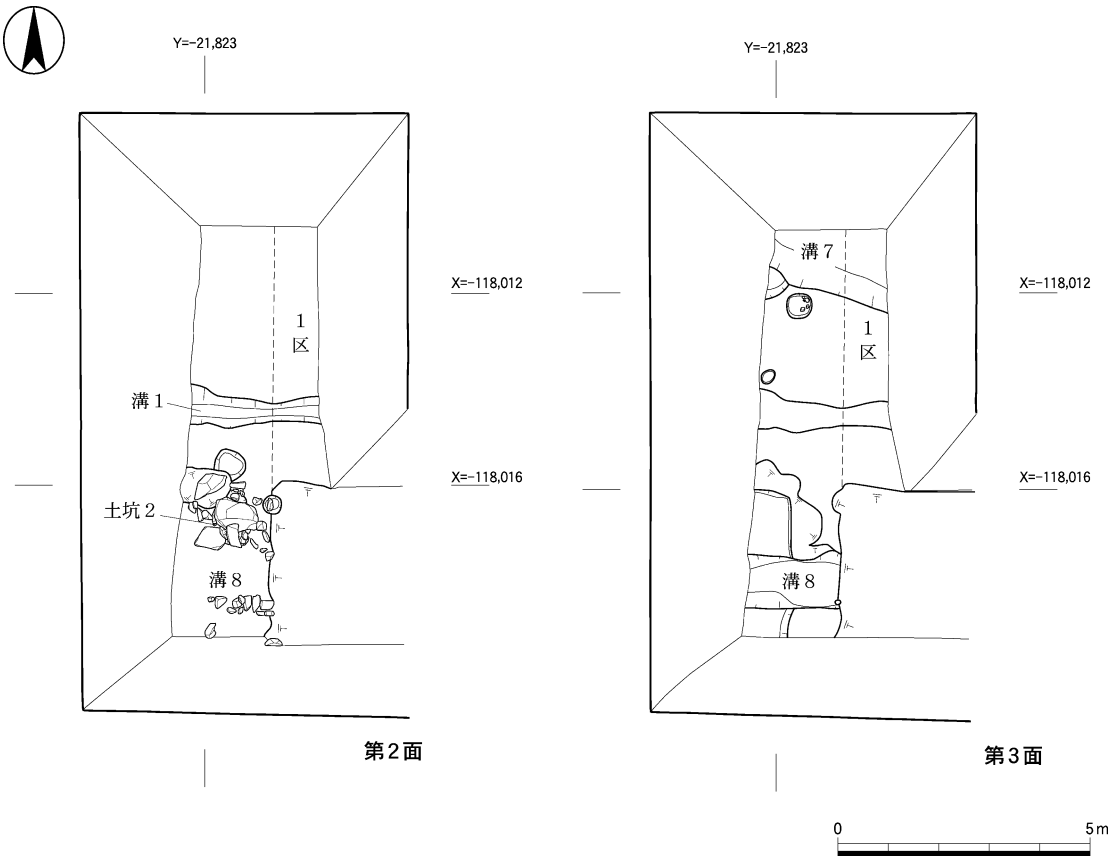


図 22　7 区遺構平面図（1：150）

mである。西に向けて幅が拡がり、底部も西に傾斜する。埋土は灰黄褐色粘土である。出土遺物はない。

溝８　第２面で検出した。東西方向の溝である。東側は 1 区で検出した溝 1472 につながり、西側は調査区外へ延びる。断面形は浅い逆台形で、長さ 1.9 m以上、幅約 1.1 m、深さ約 0.4 m である。西側は浅く段を作り直交する方向に拡がり、底部は西に向けて傾斜する。北側・南側の肩部には大きさ 10 ～ 50 ㎝の石が不規則に並ぶ。埋土は黄灰色粘土で、17 世紀後葉から 18 世紀中葉の遺物が出土した。

土坑２（図 23）第２面で検出した。長径約 90 ㎝、短径約 60 ㎝、厚さ約 30 ㎝の花崗岩を平坦な面を上にして据え付ける。掘形は長径約 1.0 m、短径約 0.8 mの楕円形で、深さ約 0.2 mである。大きさ 10 ～ 20 ㎝の根石を詰める。埋土は灰オリーブ色砂泥である。時代を確定できる遺物は出土していない。

溝７　第３面で検出した。南東から北西に延びる溝である。東側は 1 区で検出した溝 1449 につながり、西側は調査区外へ延びる。長さ 1.4 m以上、幅 1.4 m以上、深さ 0.5 m以上である。底部は西に向けて傾斜する。埋土は暗灰黄色粘土・褐灰色粘土で、16 世紀後葉の遺物が出土した。

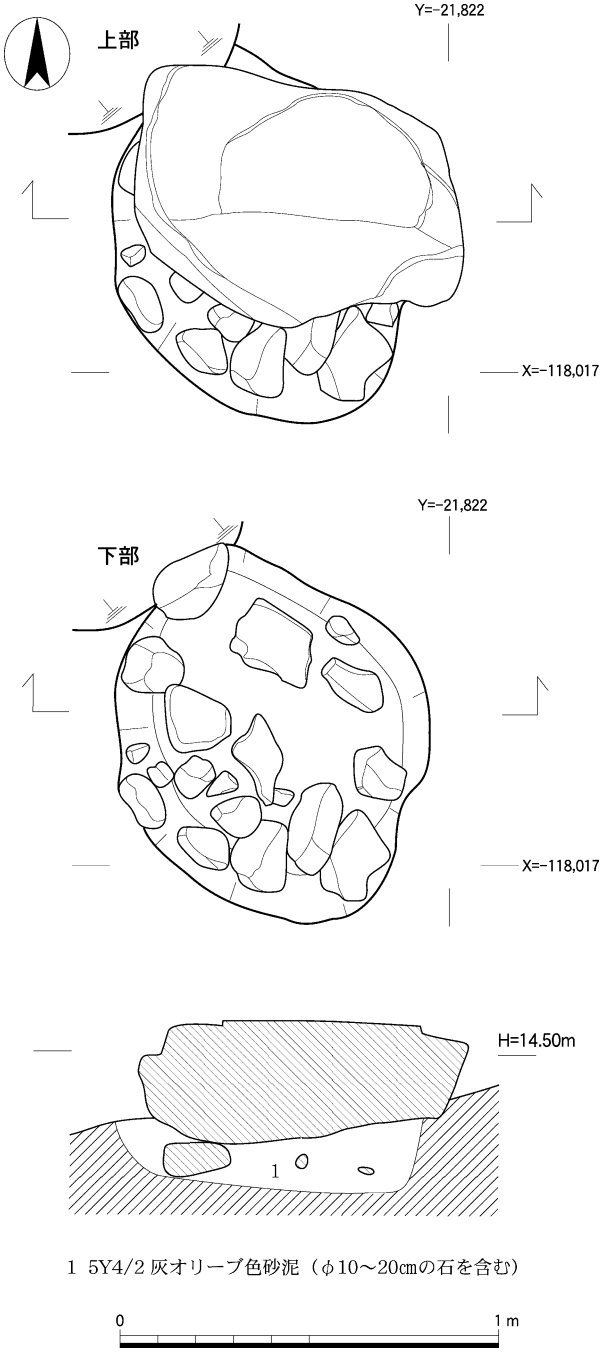


図 23　７区土坑２実測図（１：20）

（２）７区の遺物

７区は６区と同様、調査面積が狭いため遺物の出土量が少ない。したがって、７区の遺物についても概要を記載するにとどめる。

７区では整理用コンテナに２箱の遺物が出土した。出土遺物には土器類・瓦類・木製品・土製品・石製品・金属製品・植物遺体などの種類がある。出土遺物の大部分は土器類が占め、そのほかの種類は少ない。

土器類には土師器・瓦器・焼締陶器・国産施釉陶器・国産磁器があり、17 世紀後葉以降に属するものがほとんどを占める。16 世紀後葉の土器類には溝７から出土した土師器の鍋、瓦器の鍋・釜、焼締陶器の擂鉢・壷・甕、国産施釉陶器の皿がある。溝７からは飛鳥時代から奈良時代に属する須恵器の壷も出土している。17 世紀後葉以降の土器類には土師器の皿・焙烙・火鉢、焼締陶器の擂鉢・壷・甕、国産施釉陶器の椀・擂鉢・蓋・壷・甕、国産磁器の椀・皿・鉢・壷がある。

瓦類には軒丸瓦・軒桟瓦・丸瓦・平瓦・桟瓦・道具瓦・塼がある。軒丸瓦の文様は巴文である。木製品には溝８から出土した加工痕のある木片があるが、用途は不明である。土製品には土人形・窯道具がある。窯道具は円盤形をしており片面の３方に小さく短い突起がある。石製品には石塔の擬宝珠片がある。溝７から出土した。金属製品には煙管・銅銭がある。煙管は吸口、銅銭は寛永通寶である。植物遺体には木片がある。

7．まとめ

今回の調査成果を第１次調査の成果をふまえてまとめておく。なお、第１次調査１区～３区、第２次調査４区～７区で検出した主要遺構の変遷を室町時代（図 24)・桃山時代（図 25)・江戸時代（図 26）の３つの段階にまとめたので参照していただきたい。

４区の調査　室町時代後期の確実な遺構は溝 249 のみである。出土遺物はないが、南側の１区溝 1731 との関連から判断した。室町時代の遺構が少ない原因は、城下町造営前の旧地形で４区周辺の方が１区周辺よりも高かったため深く削平されたこと、また、後述するように江戸時代前期から中期にかけて多数の土取穴が穿たれたため遺構が攪乱されたことが考えられる。第２面東部では出土遺物はないが、深さ 0.1 m程度の浅い土坑を数基検出しており、これらの中には室町時代後期に属する遺構が含まれている可能性がある。

桃山時代の遺構も少ない。溝 215 は南部町通に直交することから区画溝の可能性がある。

江戸時代前期から中期にかけては西部を中心に多数の土取穴が分布する。土坑 204・土坑 236・土坑 247・土坑 248 にみられるように連続して計画的な土取りが行われた。伏見の町が拡充・整備された時期であり、建築資材として粘土や砂利が採取されたことがわかる。土取穴は土坑 236 のように直ちに埋め立てられた場合もあったが、腐植土が堆積する土坑 180・土坑 250 のようにある程度の期間にわたって開口していた場合もあった。多くは不要になった土器類・瓦類・木製品などを処理する廃棄土坑として利用されたようで、出土遺物に年代幅があることもこれを裏付ける。したがって、この時期４区周辺では建物などは作られていなかったこととなる。柱穴列 259・256・175・167、柱穴列 259・256・252・168 は同じ位置で造り替えられており、土坑 180 の南辺が接する状況などから区画の柵であった可能性が高い。

江戸時代中期になると土取穴は埋め立てられ、広い範囲にわたって整地が行われた。調査で検出した第２層にあたる。第２層や土取穴からの出土遺物から 18 世紀中葉頃と推定できる。境界は明確ではないが、桃山時代に既に建物が建ち並んでいた１区周辺と土取りが行われていた４区周辺では、土地の利用状況や整備の過程に違いがあったことが判明した。

整地層上面では東部に井戸 127・井戸 234・井戸 140 が作られる。西楽図子通から約 10 mの位置になる。柱穴などがまとまらないため建物の復元はできていないが、井戸が建物に付属するものであれば西楽図子通に面して出入口を開く町屋が建ち並んでいた状況を推定できる。したがって西楽図子通の整備はこの時期にまで遅れる可能性がある。

また、西部では土間 17 を中心とする遺構群がある。土間 17 は作業場と考えられ、機能は不明であるが、土坑 27 は付属施設であろう。近接する土坑６・井戸５からは多量の鉄滓とともに鞴羽口や炭、熱を受けて変色した陶磁器・瓦が出土しており、何らかの鉄製品生産が行われていたことは明らかである。北部中央には漆喰の枡や溝を据えた土坑 36・溝 38、中央部には漆喰の枡を据えた土坑 86 があり、４区東部・１区北部の遺構からも鉄滓・坩堝・鞴羽口などが出土していることから、４区中央部付近までを占める規模の工房を想定できる。検出遺構や出土遺物が断片的なため鉄製品生産の詳細は不明であるが、土間 17 がかさ上げを繰り返しながら同じ位置で維持さ

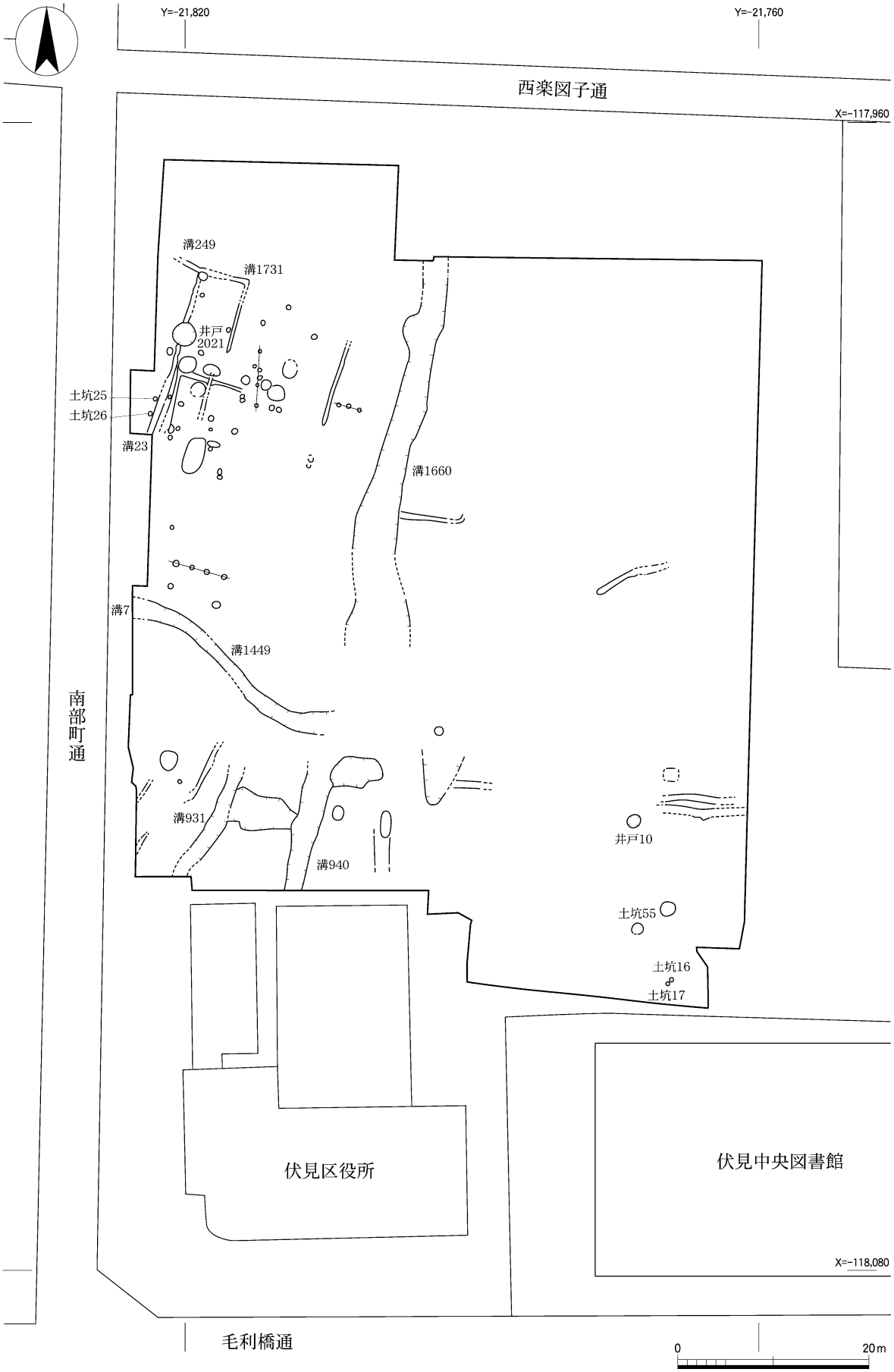


図 24　遺構概要図　室町時代（1：600）

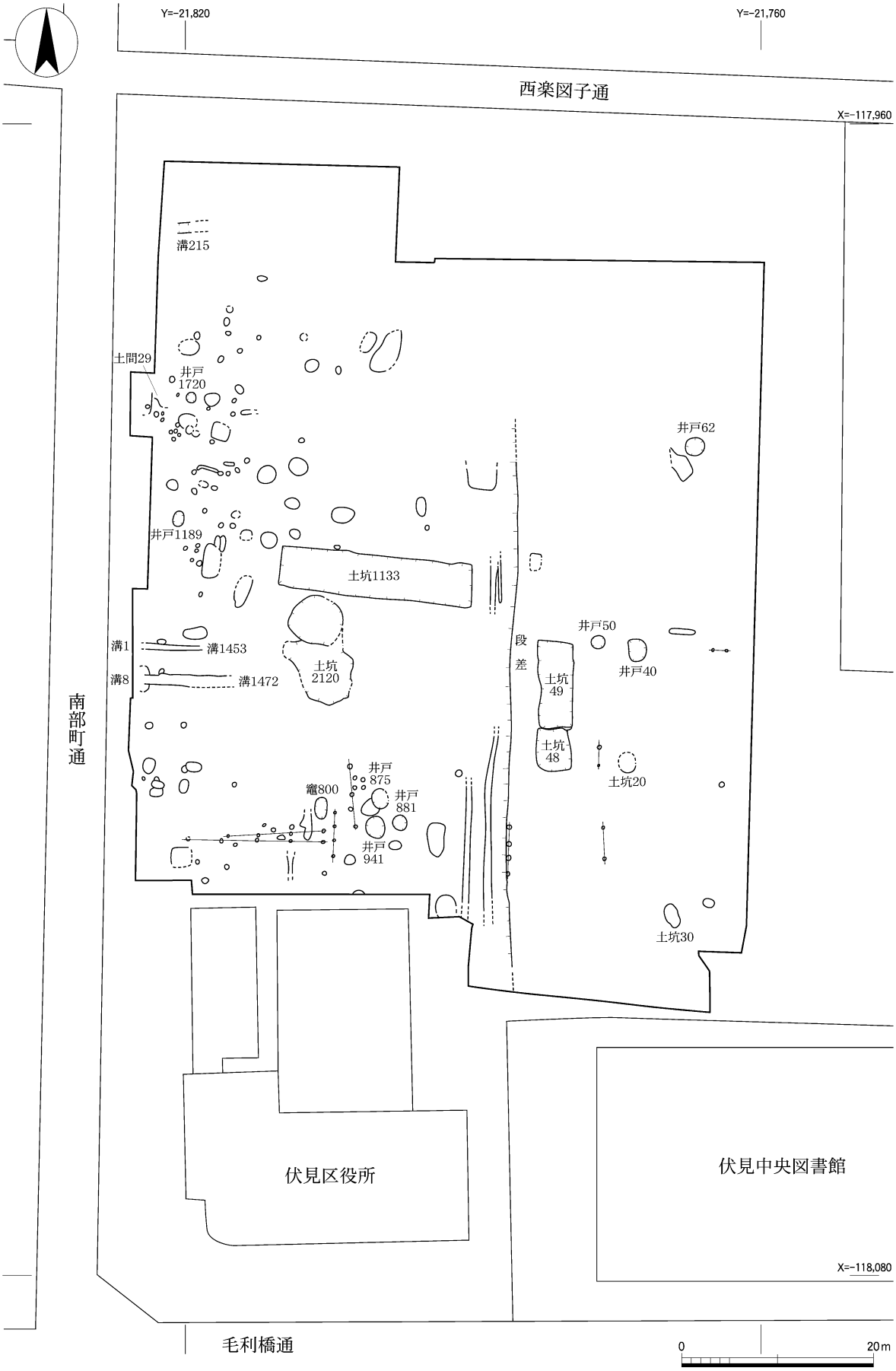


図 25　遺構概要図　桃山時代（1：600）

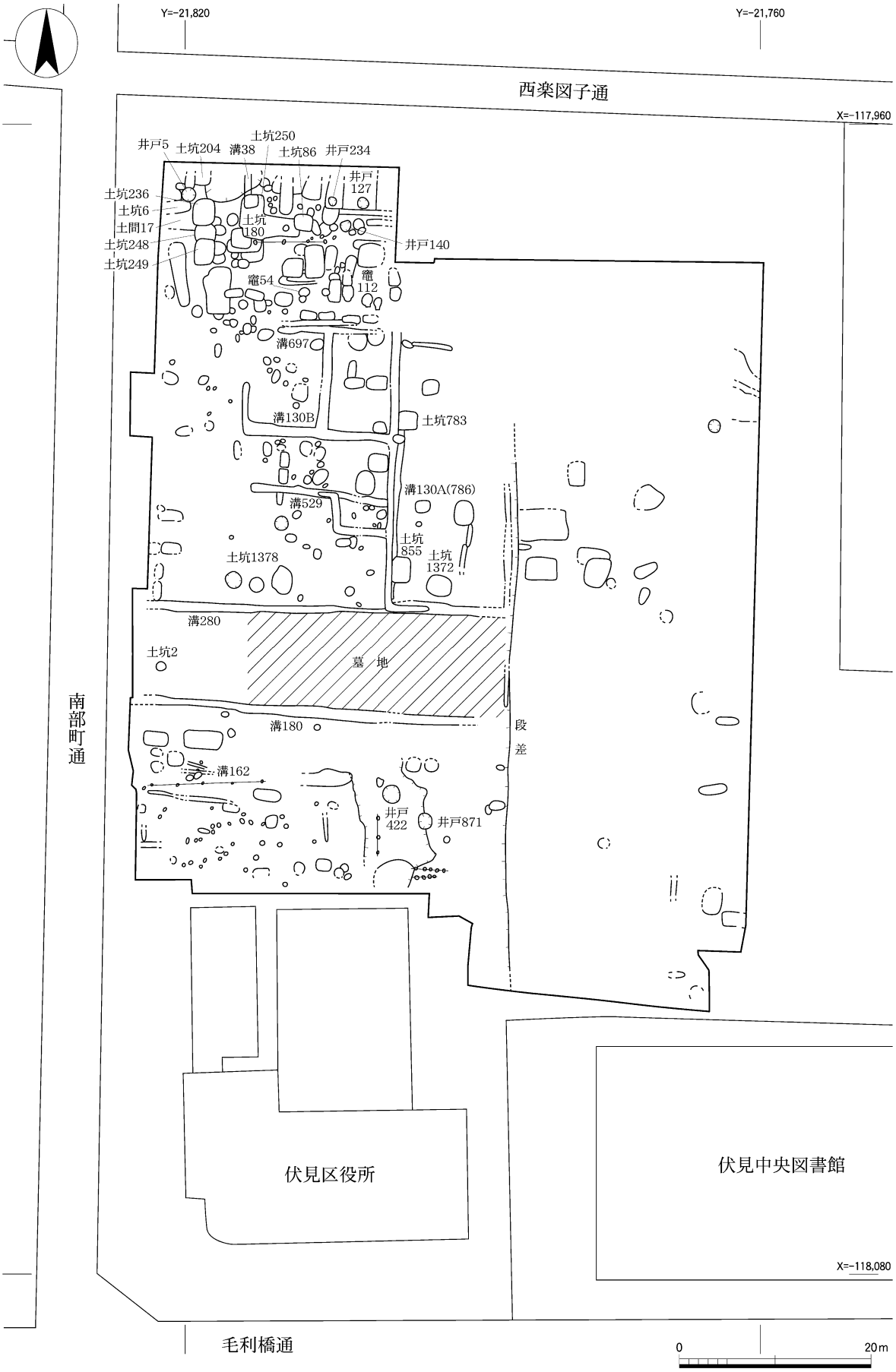


図 26　遺構概要図　江戸時代（1：600）

れたことや、19 世紀の遺物と共伴する鉄滓も多いことから、江戸時代中期から後期にかけて、かなりの規模で継続的な鉄製品生産が行われていたことがわかる。また、西楽図子通を隔てた北側の発掘調査で江戸時代の鉄滓・坩堝・鞴羽口など製鉄に関連する遺物が出土しており[13]、伏見での生産・生業の分布を考える上で興味深い成果となった。

５区の調査　５区は北側の２区と同様、大部分が近代以降の著しい攪乱を受けていたため検出遺構・出土遺物とも少ない。しかしながら、室町時代の遺物が出土した土坑 16・土坑 17 を検出したことにより、室町時代後期の遺構が調査地南東部に拡がっていたことが明らかとなった。

また、第１次調査で検出した桃山時代の段差の延長を確認したことから、段差がさらに南へ延びていることが追認できた。

６区の調査　室町時代後期の溝 23 は東側の１区の同時期の区画溝と同じ方位をとり、同様の区画溝であることがわかる。肩部に位置する土坑 25・土坑 26 は建物や塀の一部と推定できる。これらのことから室町時代後期の集落が調査地よりさらに西側に拡がっていたことが追認できた。

桃山時代では土間 29 を検出した。なお、第２- １面・第２- ２面の調査では、調査地西側の南部町通の路面・東側溝の検出を期待したが果たせなかった。これらの遺構はさらに西側に位置していることとなり、南部町通の路幅は城下町造営の段階からあまり変化していないことが明らかとなった。

江戸時代中期以降の遺構にはまとまりを看取できないが、引き続き頻繁な土地利用が行われていたことがわかる。

７区の調査　溝７は１区溝 1449 の延長であり、室町時代後期の集落の東側を画する１区溝 1660、３区溝 940 と連動して西側への排水機能を担っていた。

溝１・溝８もそれぞれ１区溝 1453・１区溝 1472 につながる排水機能を担った溝である。７区でも南部町通の路面・東側溝の検出を果たせなかったので、南部町通の路幅については６区と同様の成果を得ている。溝８の西側が拡がる形状から東側溝までの間に何らかの施設があった可能性が考えられる。大きな花崗岩を据え付けた土坑２は礎石と考えられるが、単独で存在し、用途・機能は不明である。また、溝１・溝８の状況から周辺に門などの施設を想定することはできないので、第１次調査で検出した墓地への出入りは本堂があったと推定している北側から行われたと判断できる。

註

１）『伏見城跡　京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-27』(財) 京都市埋蔵文化財研究所、2007 年。

２）歴史的状況については次の文献を参考にした。『伏見町誌』伏見町役場、1929 年（1974 年復刻）。京都市編『京都の歴史』学芸書林、1968 ～ 1976 年。『京都市の地名』平凡社、1979 年。『図集日本都市史』東京大学出版会、1993 年。『豊臣秀吉と京都』文理閣、2001 年など。

３）「伏見城城下町」『昭和 61 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所、1989 年。

４）伏見城跡１」『昭和 60 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所、1988 年。

５）「伏見城跡発掘調査終了報告書」古代文化調査会、2004 年。
６）『伏見城跡　京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-18』(財) 京都市埋蔵文化財研究所、2005 年
７）『京都市内遺跡立会調査概報　平成６年度』京都市文化観光局、1995 年。
８）『京都市内遺跡立会調査概報　平成４年度』京都市文化観光局、1993 年。『京都市内遺跡立会調査概報　平成６年度』京都市文化観光局、1995 年。
９）『京都市内遺跡立会調査概報　平成 14 年度』京都市文化市民局、2003 年。
10）『京都市内遺跡立会調査概報　平成９年度』京都市文化市民局、1998 年。
11）『京都市内遺跡立会調査概報　平成８年度』京都市文化市民局、1997 年。
12）註１）に同じ。
13）註６）に同じ。

図　　版

報　告　書　抄　録

ふ り が な	ふしみじょうあと
書　　名	伏見城跡
シ リ ー ズ 名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２００７－１５
編 著 者 名	山本雅和・能芝妙子
編 集 機 関	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発　行　所	財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発 行 年 月 日	西暦2008年３月12日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
伏見城跡（ふしみじょうあと）	京都市伏見区（きょうとしふしみく）竹中町（たけなかちょう）640番地（ばんち）	26100	1172	34度56分11秒	135度45分40秒	2007年11月27日～2008年２月４日	約540㎡	総合庁舎整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
伏見城跡	城跡	古墳時代後期～鎌倉時代	なし	須恵器	
		室町時代	溝、土坑	土師器、瓦器、焼締陶器、国産陶磁器、中国製磁器	
		桃山時代	溝、土坑、土間、段差	土師器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶器、中国製磁器、瓦類	城下町の構造が明らかになった
		江戸時代	溝、土坑、井戸、柱穴、石列、土間	土師器、焼締陶器、国産施釉陶器、国産磁器、瓦類、木製品、土製品、石製品、金属製品	金属生産に関わる遺構・遺物を検出した

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2007-15
伏　見　城　跡

発行日　2008 年 3 月 12 日

編　集

発　行　財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435　℡ 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093　℡ 075-256-0961